國文選 巻三

42
810
B85

41819
教科書文庫
4
810
41-1930
20000
67111

資料室

昭和五年十一月二十八日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國文選

東京高等師範學校教授
垣內松三編

広島大学
教
67111
図書

42
810
BB5

一　縦に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。

一　文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。

一　教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一　原作の更改は教科書としての用意に出づ原作家の諒恕を乞ふ。

目次

一　學者の苦心……芳賀矢一……四

二　花影の中に……田山花袋……一一

三　山路の茶屋……夏目漱石……二六

四　詩二篇……百田宗治　千家元麿……三一

五　蓮……豐島與志雄……三四

六　灯を消して……櫻井忠溫……四五

七　銃……久米正雄……五五

八　孤島より……窪田空穗……六七

九　長江溯江記……遲塚麗水……七九

一〇　海の旅……島崎藤村……九〇

一一　木精……森鷗外……一〇五

一二　廢れたる園（歌評）……若山牧水……一一五

一三　轡十文字……菊池寛……一二四

一四　近江聖人……橘南谿……一三四

一五　野火止の用水……一四一

一六　草の匂……薄田泣菫……一四五

一七　擊滅……小笠原長生……一五三

一八　蠶……山本有三……一五七

一九　小品二題……國木田獨步　北原白秋……一六一

二〇　田園雜興……大町桂月……一六七

二一　小園の記……正岡子規……一七五

一　學者の苦心

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで、人の子の母となつて居る。短いやうで長いものである。今や其の第一卷がいよいよ出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、而もそれよりは大きい一種の喜悦を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに

上田萬年　文學博士。慶應三(一五二七)年生まる。東京帝國大學國文科の出身。東京帝國大學教授・神宮皇學館長・國學院大學長等に歷任せり。

松井簡治　文學博士。文久三(一五二三)年生まる。東京帝國大學古典科の出身。東京文理科大學教授・東京高等師範學校教授たり。

心祝

余　芳賀矢一。文學博士。福井市に生まる。東京帝國大學國文科の出身。東京帝國大學教授・國學院大學長の職にありき。昭和二年歿す。年六十一。

「初孫の誕生」

窮りがない。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、わが日本の國勢を一變せしめた政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業はかういふ中に徐々と其の工程を進めて行つたのである。

上田萬年

鑛山から掘出されて、擇分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬となく、古語や新語が幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事がはてしなくいつ

「通常の十年ではなかつた」

典籍

カード　紙片。Card.

「はてしなくいつまでも」

までも續く。傍から見れば、捗の行かぬことは齒痒いやうで、何時方のつくことかと危まれるほどであつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも、夜半の半鐘に肝を冷して、餘處ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二

松井簡治

君の筆と頭腦は、間斷なく此の間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、其の進歩は遲いが、其の成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も、遂には山を成す喩のやうに編纂の稍ゝ緒に就いたまでには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は、幾隻となく進水式場に浮かび出たのであつた。

齒痒い

邸　東京市小石川區關口駒井町。

砂子

緒に就く

學者の仕事は地味である。目覺しく世人を驚かすやうなことは無い。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども、一たび其の室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人と雖も其の難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣とを尊敬せずには居られぬ。さうして、それが決して學者の閑事業では無くして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査・整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とは言はれぬ。あらゆる方面の發展は、教育の力に賴らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何

拮据

「國家的大事業」

等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絕大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて、鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに增加したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦位で滿足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に採りての立派な强みになる。此の一大產物が堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる余の言ひ知らぬ喜悅を感ずる所以である。此の十年は國語界に於ても亦無

「一大戰艦にも譬ふべき」

文物

「國語界に於ても」

意味な十年では無かつたのである。

學者の事業はいつも世間と沒交涉のものでは無い。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、世間を一日も餘處に見て居る譯には行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも絕えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易の業では無い。靜寂な編輯室は紛糾した實社會と常に相往來して居るのである。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。後世の人は必ずこれを明治時代に企てられて、大正時代に完成せられた大事業の一つに數へるであらう。

紛糾

「大きな國家事業」

余は二君の満足と喜悦を察知すると同時に、今か〳〵と十餘年を待暮らした同友と共に、先づ二君の成業を祝して一大白を浮かべようと思ふのである。（「大日本國語辭典」の序文）

繼續ほど困難なることはない。凡人に困難なるのみならず、古來の英雄さへもこれを難しとして居る。北條時賴も、

幾たびか思ひさだめて變るらむ賴むまじきは我がこころなり

と詠んでゐる。德川家康の遺訓にも「人の一生は重荷を負うて遠き途を行くが如し」とある。支那には有名な孟母斷機の教が傳へられてゐる。以て最初の決心を繼續し貫徹することの如何に難いかが察せられるであらう。

立志はあつても、毎日撓みなく繼續して行かなければ實は結ばない。經絲と緯絲とがあつて織物は出來、立志と日々の實行とが伴なつて、始めて目的を貫くことが出來るのである。繼續の難行を成し得るものこそ偉人であり傑士である。

（新渡戸稻造の文による）

大白

大日本國語辭典 五卷。上田萬年、松井簡治の共著になる國語辭典。

北條時賴 鎌倉第五代の執權。弘長三（一九二一）年卒す。年三十七。

孟母斷機 孟子の少時、學を中途に廢して歸りたるを見て、その母が織りゐたる機を切斷して訓へたる故事。

新渡戸稻造 農學博士・法學博士。文久二年江戸に生まる。札幌農學校の出身。第一高等學校教授・國際聯盟事務局名譽書記官長等に任ず。貴族院議員。

二 花影の中に

一

田山花袋

嘗て湊川の古戰場を弔うた時、自分はつく〴〵正成の死を思ひ、義貞の死を思ひ、吉野朝の運命のはかないのを思つて、前の海の暗くなるのも知らずに、長い間追懷に耽つた。追懷の餘り、自分は遂に路を迂回して河内に入り、赤阪・千早の遺跡を訪ひ、金剛の峻嶮を攀ぢて、櫻雲深き吉野山に、吉野朝五十年の悲劇の跡を弔はうと決心した。そして四月の十六日に神戸の宿を出た。

湊川 神戸市の中央を流る。延元元（一九九六）年五月二十五日楠木正成こゝに戰死す。

「前の海の暗くなるのも知らずに」

赤阪 大阪府南河内郡赤阪村。

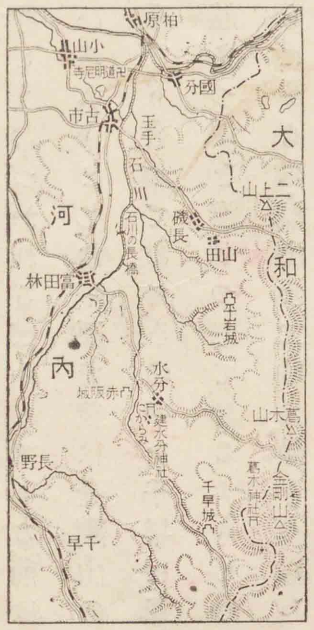
千早 同郡千早村。金剛山の西麓。

金剛山 大阪府南河内郡と奈良縣南葛城郡との境にあり。海拔一二〇四米。

始めてなつかしい金剛山の翠色に接したのは、柏原の停車場をおりて、石川の長橋をこれから渡らうとした時であつた。この日はよく晴れて、此の頃の空にかゝりがちな霞も、いつものやうに深くはかゝらず、美しい日の光がきら〳〵とその山の一面に輝きわたつて、空氣の加減であらうが、どうかすると、秋の初の空ではないかと疑はれるほどであつた。ぢつと見ると、ふわ〳〵した雲が、半腹よりも少し上かと思ふあたりに面白くたなびいてゐて、その緣が金色のやうに美しく日の光に輝いて居る。けれども、此の雲も歩いて行くうちに段々形が變つて來て、道明尼寺の前に來た頃には、ちやうど吹流しの旗のやうになつて、今ははや山の頂上近くまで靡いて行つた。風が麥の葉末を動かすほどもなくて、

柏原　大阪府南河內郡の町。
石川　南河內郡內を北流して大和川に入る川。
道明尼寺　南河內郡道明寺村にある眞言宗の尼寺。

遊絲がきら〳〵と菜の花の畑の上に漂つてゐるさまは、何ともいへないほど長閑に感じられた。自分は絶えず金剛山に眼を注ぎながら、いろ〳〵な事を考へつゝ歩いた。



障壁を立てたやうな、いかにも城のあとゝも思はれるやうな高い平な丘が見え始めて、その上には菜の花が毛氈をかけたやうに、幾段にも美しく階段を作つて居る。それが赤阪の城址である。自分はその城址の上に登つて、遙かに泉河二州の平野を見渡したのは、それから水分の楠公社に詣で、楠公生誕處の跡を尋ねて、板を立て

遊絲　「絶えず金剛山に眼を注ぎながら」
泉・河　和泉・河內。
水分　ミクマリ。南河內郡赤阪村の字。

たやうな阪をなほ一登りした後である。城址といふのはさして廣い處でもないが、さすがは名將の眼識で選んだほどあつて、その地の利に富んでゐることは、自分等が見ても成程とうなづかれるばかりである。前は一望千里と言はるゝひろ〴〵とした平原で、後は金剛山の峻嶺が幾重ともなく重なり合つてゐて、その中を千早に通ふ一すぢの路が、山を越えつ川を巡りつして、はる〴〵とつゞいてゐる。であるから、にからみ・桐山の二城と壘をつらねて互に相應援したならば、敵は容易にこの赤阪の城下に押寄せる事は出來なかつたに相違ない。けれども開いてゐるだけに、事によると攻落される憂は無いでもないから、正成はそれを慮つて、本丸を千早の山奥へと築いたのであらう。千早はそこから五十

「千早に通ふ一すぢの路」

にからみ・桐山　共に赤阪城の一城塞。

本丸

町ほど山奥で、路といつてはほんの一すぢ路で、右も左も仰ぐばかりの高山に圍まれて、それは〳〵谷間の奥の奥と言つたやうな、極めて嶮しい處であるから、どれほど多人數で攻圍んでも、何の功をも奏する事が出來なかつたのである。

自分は赤阪の城址に立つて、正成がしば〳〵奇兵を出して敵の大軍を惱ました樣やら、城の遂に支へられぬのを悟つて、火を城に放つて千早の山奥に隱れた時の事やら、天下の兵をこの一孤城に引受けて、孤立大義を唱へた樣の、どんなに雄々しかつたかといふ事やらを、久しくなるまで思ひやつたが、遂に思ひ切つてそのまゝ千早の古跡へと向かつた。

行つて見ると、その村は、これが有名な千早かと驚かるゝ

嶮し――けはし。

奇兵

大義

「驚かるゝばかりの寒村で」

ばかりの寒村で、自分は何だか秩父の山奥へでも迷ひ入つたやうな心地がした。村中には一道の清溪が潺湲と流れ、水車が到る處にかけられて、さも面白げにめぐつてゐるが、その兩岸に、萱葺屋根の粗末な家が四五十軒ほど歷落と連なつてゐるばかりで、處々には、木挽小屋なども交つてゐるのが見え、そして向の山で木をきる音が丁々と雲中に響くのも聞える。

このやうな處で、よくも八十萬の兵を防ぐことが出來たと思ひながら、駄菓子屋の前の土橋を渡つて、少し前に教へられた村人の言葉通りに、小學校の前から麥畑や菜畑の階段をなしてゐる間をてく〳〵と登つて行つた。すると間もなく一基の塔の立つて居る阪の登口の處へ出た。なほ其處

秩父　埼玉縣の西境、荒川上流の盆地。
潺湲
歷落
丁々

を一町ほど登ると、山の半腹に少しくひろ〴〵とした處があつて、其處が卽ち有名な千早の城の址であつた。自分は此の傍に祀られてある楠公祠の前に禮拜して後、其の城址を彼方此方とさまよひ歩いた。まことに天險といつても、これほど天險の處はあるまいと思はれるほどで、これではいくら大兵が攻寄せても、容易に攻落す事が出來なかつたのも無理ではないと思つた。

けれども、地理の上から考へて見ると、正成が此處に籠つたのは、丁度むぐらが穴の中に引込んだのと同じ事であるが、それも據なかつたことであらうと自分は思ふ。

首塚やら、屋敷跡やらをあまねく探つて、また更に一歩二歩登つて行くと、非常に風情のある老松が幾本となく茂つ

傍——かたはら。
「據なかつたことであらう」
風情

てゐて、路は其の間を金剛山へと續いてゐる。自分は此の路を少し廻らうとして、傍の榛莽の中に埋められたやうになつて、古い石の玉垣で圍まれた一基の圓い墓石の、しよんぼりと立つて居るのをそれとなく認めた。誰の墓かと近寄つて見ると、其處には『楠木正儀墓』と明かに記されてある。

急に自分は悲しくなつた。それは今この墓を見て、楠氏の末葉が微々たる有樣になつてからも、どんなに吉野朝に力を致したかといふ事に思ひ到つたからで、日本全國の勤王の士が、大方敵軍に降つてしまつた後までも、正儀はわづかにこの千早を保つて、始終正義のために節を變へなかつたのを思ふと、自分は殆ど涙をこぼさずには居られなかつた。殊に歴史では、この正儀が一度敵軍に降つたといふ事を惡

榛莽

正儀　マサノリ。正成の子。正行の弟。元中(二〇四四)年間卒す。

「わづかにこの千早を保つて」

しざまに記して、父祖の志を辱めたなどと、一概におとしめて論じてあるが、然しそれはまことの心ではなくて、吉野朝の振はないのを慨嘆した餘り、色々と思案した結果、ほんの方便に敵軍に降つたのではあるまいか。そして若し其が果してほんの方便であつたのに、その志も行へず、その苦肉の計も遂げられず、徒に不忠・不孝の者と後世にあざけられたのであつたなら、正儀の口惜しさはどんなであらう。自分の涙はいよ〳〵溢れた。

二

頭上では幾百年を閲した老松が、冬の初の時雨のやうな寂しい音を立ててゐる。自分はその悲しい寂しい音を聞きながら、つく〴〵と六百年前の事に思ひ耽つた。

おとしめ

方便

苦肉の計

「幾百年を閲した老松が」

金剛山を越えて、吉野の六田の渡を渡つたのは、其の日の午後四時少し過ぎた頃であつたが、途中、花を挿して歸つて來る人に聞いて見ると、花は今眞つ盛りで、今一日早くても遲くても、滿開を見る事は出來ないとの話であつた。漸く六田の柳の渡のほとりに來た頃は、夕日がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、清い速い吉野川の流は、きら〱と美しい波紋を川の面に描いて居た。自分は船が前岸に着くと、そのまゝ急いで飛びおりて、一直線にその懷かしい吉野山へと志した。

街のはづれに一つの黑い門があつて、此處から奥の院まで六十町餘りと書いた札が立つてゐるが、それをくゞると、もう山で、櫻の花が段々路の兩側に見え出して來る。入口は

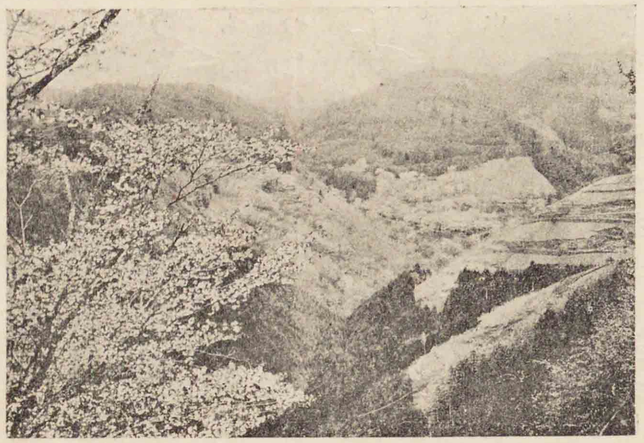
六田　ムダ。奈良縣吉野郡吉野村の字。

「今一日早くても遲くても」

吉野川　紀の川の上流。

奥——おく

盛りが過ぎて、花びらの枝に殘つて居るのも極めて少いが、



吉野山

次第に登れば登るほど、花は眞つ盛りであつて、四邊の眺望の美しさは、殆ど言葉にも筆にも盡くす事が出來ないほどである。右手には、越えて來た金剛山が偉丈夫の端坐してゐるやうに聳えてゐて、それを仰ぐと、護良親王が十津川から此の地に入つて、千早・赤阪と共に三足鼎立の勢を作らせ給うた時の事などが、すぐ胸をついて浮かんで來る。

「偉丈夫の端坐してゐるやうに」

十津川　熊野川の上流。

鼎立

兩側の花はいよ〳〵美しい。自分は行く〳〵右と左との大澤を見おろしながら、夕日の花やかな光のぱつと谷間谷間の櫻花の上に匂ひ渡るのを見て、獨りつく〴〵とこの山の景のいかに懷古の情を起すに適して居るかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い。けれども吉野朝の遺跡が無かつたら、決してこれほどの感興を起す事はなかつたらう。

村上彦四郎義光の墓の前にひざまづいた時は、自分は何とも知れぬ懷古の感に打たれて、暫しは其處を立去る事が出來なかつた。前には片岡八郎があつて、親王の難を玉置山に救ひまゐらせ、後には此の彦四郎義光があつて、身を以てこの吉野の遁口を安全に守りまゐらせたのであるが、もし後年に至るまで、この忠勇無二の義光が生きて居たならば、

「櫻花の上に匂ひ渡る」

村上彦四郎　護良親王に從ひ十津川より吉野に入り、元弘三（一九九三）年、親王に代つて戰死せり。

片岡八郎　護良親王に從ひ、元弘二年十津川玉置山に戰死せり。

玉置山　タマキヤマ。奈良縣吉野郡十津川村。同縣の南隅。

親王は決して鎌倉においてはかない最後を遂げさせ給ふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを恢復する事が出來たかも知れない。つたないのは吉野朝の運命である。

この時である。自分の立つて居る傍を、一群の醉客が蹌々踉々として歩いて來たが、卑しい歌を唱ひながら遠慮もなしに、自分の肩をかすめるやうにして過ぎて行つた。自分はすでにこの山に登つた時から、心もない花見客のわい〳〵と酒に醉つて歩くさまを、非常に快からず思つてゐたが、今は丁度自分の心が無限の感慨に打たれてゐる時の事とて、一層深く憤慨して、一つ罵倒してやらうかと思ふほど癪に障つた。

けれども花の穩かに咲匂つてゐる間を、一歩二歩とたど

つたない

蹌々踉々

「無限の感慨に打たれてゐる時の事とて」

つて行くと、その癪に障つた念は一種深い深い悲哀の情に變つて、どうにもかうにもたまらないやうな心地になつて淚がはら〳〵とやつれ果てた旅の衣の袖を傳はつて落ちた。そして草莽の孤臣といふ感が胸も狹しと溢れて來て、自分も若し其の時代に生まれたならば、たとひ雜兵となつても、この勤王の志を致したであらうにと思つた。

其處から吉野の山奧までは五十町、自分はこの間をどんな感慨と、どんな淚とを以て行過ぎたであらうか。護良親王の奮戰した藏王權現堂の高く櫻花の上に聳えて居るのを仰いでは、どんなに烈しい懷古の情に打たれたであらうか。吉水院の行在所のあとを尋ねては、どんなに深い暗淚に咽んだであらうか。

草莽の孤臣

「たとひ雜兵となつても」

藏王權現堂 役小角の開基。金峯山寺の本堂。

吉水院 元は金峯山寺の供僧坊。明治九年吉水神社と改め、後醍醐天皇を祀る。

こゝで、この花の中で、後醍醐天皇は劍を按じておかくれなされたのである。こゝで楠木正行は歌を扉の上に殘し、死を決して敵軍に向かつたのである。此處で吉野朝五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は赫々として光を日月と爭つたのである。そしてその六百年前の夢のあとは、今もなほ美しい滿山の花影の中に、微かに匂ふばかりに殘つてゐるではないか。

これほど美しい詩があらうかと、自分は幾度も思つた。

自分はかういふ風にこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一層深くこれに對する同情の念を增したが、翌日吉野山を下る時には、幾度となく振返つて、殆ど別れ難い思がした。

（田山花袋—「花袋紀行集」）

劍を按じて云々 太平記卷二十一に「左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日（延元三年）の丑の刻に、遂に崩御なりにけり」

歌を云々 太平記卷二十六に正行の歌として「返らじとかねて思へば梓弓亡き數にいる名をぞとゞむる」

「滿山の花影の中に」

田山花袋 小說家。名は錄彌。明治四年群馬縣に生まる。紀行文作家としても有名なり。昭和五年歿す。年六十。

三　山路の茶屋

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに廂から吊されて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、側に五厘錢と文久錢が散らばつてゐる。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれてゐた鷄が、驚いて眼をさます。ク、、ク、、と騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

「返事がない」

屈託氣

文久錢　ブンキウセン。文久年間に鑄たる錢。

「又聲をかける」

幸ひ——さいはひ。

返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰をおろした。鷄は羽搏をして、臼から飛びおりる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで馳けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、コケツコツコと云ふと、雌が細い聲で、ケ、ツコツコと云ふ。丸で余を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枡ほどな煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。土竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は呑氣に燻

「ずつと這入つて」

雄——をす

とぐろを捲く

「奥の方から足音がして」

「誰か出るだらうとは思つてゐた」

つてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の店を明放しても苦にならないと見える處が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。こゝらが非人情で面白い。其の上出て來た婆さんの顏が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これは美しい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが、橋懸を五六歩來て、そろりと後向きになつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顏が殆ど眞むきに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、其の表情はぴしやりと心のカメラへ燒附いてしまつた。茶店の婆さんの顏は、此の寫眞に血を通はせたほど似てゐる。

非人情

寶生　ホウシャウ。能の一派。寶生蓮阿彌を祖とす。

高砂　タカサゴ。能の一。阿蘇の神主友成が京都に登る途中、播州高砂にて、松の化身と物語ることを作りしもの。

活人畫

橋懸　ハシガカリ。能の舞臺と樂屋とを結ぶ通路。欄干ありて、橋の如く構へたり。

カメラ　Camera. 寫眞の暗箱。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。おゝ〳〵、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し燃し附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。さあ御茶を一つ。」と、立上がりながら、しつ〳〵と二聲で鷄を逐ひおろす。コ、コ、と駈出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗を

「二聲で鷄を逐ひおろす」

刳拔盆

載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無雜作に燒附けられてゐる。

「御菓子を。」と今度は鷄の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて土竈の前へ踞る。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聽きたいな。ちつとも聞えないと猶聞きたい。」

袖無し

「生憎、今日は先刻の雨で何處かへ逃げました。」

折から土竈のうちが、ぱち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあ御あたり。嘸御寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い烟が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板廂に絡んでゐる。

「あゝ、好い心持だ。御蔭で生返つた。」

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました。」

逡巡として曇りがちなる春の空を、もどかしとばかりに吹拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り拔けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡くして、老嫗の指さす方に、巑岏と荒削の柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。（夏目漱石—「漱石全集」）

逡巡

「老嫗の指さす方」

巑岏

夏目漱石　小說家。名は金之助。江戸に生まる。東京帝國大學英文科の出身。朝日新聞社員。大正五年歿す。年五十。

四 詩二篇

風景

吹きつける嵐、
全力で爭つてゐる樹、
あらゆる梢を奪はれさうにして、懸命にこらへてゐる
樹、
悲鳴をあげて支へてゐる力、
空は低く、暗澹として渦卷いてゐる、
そして野のはてに
私はむらがり立つ雨雲を見る。

（百田宗治）

百田宗治 詩人。明治二十六年大阪市に生まる。

小景

窓から見ると
唐黍の青い畠が見える。
その間に平野の空、
白い夏雲の頭がもく／＼見える。
素晴しく膨脹して
大陸的な感じのする雲だ。
だん／＼伸張し擴充し、
大空に脊をのばしてゆく。
限り無く廣い空が青く澄んで鮮かだ。
燕が雲から落ちたやうに勇ましく翔つてゐる。

（千家元麿）

伸張
擴充

千家元麿 詩人。明治二十一年東京市に生まる。慶應義塾大學に學ぶ。

五　蓮

私は蓮が好きである。泥池の中から眞直ぐに一莖を伸ばして、その頂に一つ、葉や花や實をつける、あの獨得な風情もよい。また單に花からばかりではなく、葉や實や根などからまでも仄かに漂ひ出てくる、あの淸い素純な香もよい。その形、その香、そして泥土と水、凡てに原始的な幽玄な趣がある。

田舍の子供達は、眞白な蓮の根をほきりと折つて、中に通つてゐる八つの穴に何がはひつてゐるかと、好奇の眼を見張りながら、いつまでもぢいつと覗き込む。または葉の莖を折取つて、それを更に幾つにも小さく折つて、折られた莖が細い絲でつながつてゆくのを、面白さうにぶら下げて眺める。それにも倦きると、小川の淸い水を葉の中にすくひ込み、鮒や鯰の子を捕へて來て、その中に泳がせて樂しむ。或はまた大きな花を折取つて來て、その眞白な花瓣を一つ〳〵むしり取り、黄色い雄蕊・雌蕊を中に乘せ、寶を積んだ舟として、橋の上から川の眞中に幾つも幾つも流し浮かべる。

蓮の葉や花が盂蘭盆の佛壇につきものとなつてゐるのは、佛教の廣まつてゐる地方共通の周知の事柄であるが、或地方では、盂蘭盆の前、七月七日の七夕祭が可なり盛んに行はれる。七八歲の子供達は、七夕に關係のある俳句や和歌や漢詩の類を前々から習字しておいて、それを七夕の日の朝、普通の軸物くらゐの大きさに淸書し、床の間に懸けて、いろんな果物や野菜の類を供へる。その後で、女の子は、色紙(いろがみ)で小

「獨特な風情」

「素純な香」

素純

幽玄

「田舍の子供達は」

盂蘭盆　ウラボン。陰暦七月十五日に行ふ佛事。俗に「おぼん」といふ。精靈祭。

周知

七夕祭　タナバタマツリ。陰暦七月七日の夕に、牽牛・織女の二星を祭り、兒女等が裁縫・習字の上達を祈れる行事。

さな衣服を裁ち、男の子は、色紙の短册に勝手な文字を書きちらし、それを青笹の枝に吊して、縁先の庭に立てる。そして、それらの文字を書くために用ひられる硯の水は、蓮の葉に溜つた露の雫が最もよしとしてある。子供達は早朝から起出でて、夜のうちに蓮の葉に溜つてゐる、水銀のやうにとろりとした清い露の雫を、いそ〳〵として集めに出かける。

さういふ話を、一昨々年の夏、私は或友人に向かつてした。すると十日ばかりたつて、美事な紅蓮の一鉢を植木屋から屆けて來た。友人の名刺が附いてゐた。私の手蹟が餘り拙劣なので、蓮の葉の露を取つて習字でもせよといふ謎かも知れないが、併し私には非常に嬉しかつた。庭の眞中に据ゑさせて、仕事に疲れた眼を慰めた。徑一尺餘の小さな鉢だつた

「水銀のやうにとろりとした清い露の雫」

「美事な紅蓮の一鉢」

が、五六枚の葉をつけ、花を二つ持つてゐた。鉢の中の藻の間に絲蚯蚓が澤山ゐたので、それを食ひ盡くさせるために、緋目高を四五匹放つたりした。

そのうちに淡紅色の花瓣が散つて行き、葉も一二枚黑ずんで枯れていつた。花の後の漏斗形の蕚は實を結ぶ樣子もなく、小さく萎びて立枯れてしまつた。殘の葉もまだ霜を受けない先に枯れかゝつた。鉢の中を覗いてみると、彎曲したこち〳〵の根が、土の中に痛ましく露出してゐた。恐らく蓮は徑一尺餘の小さな鉢の中で、充分に伸びようとして伸びることが出來ず、窮屈のあげく窒息しかけたのであらう。さう思ふと、吾が愛する此の蓮のために、十分の泥と水とを與へてやりたくなつた。

蚯蚓—みゝず。

「痛ましく露出して」

窒息

私は近くの瀬戸物屋へ出かけていつて、其處にある一番大きな蓮鉢を買求めた。徑三尺ばかりの分厚なもので、田舍の廣々とした蓮田には及びもつかないが、一二株の蓮の生長には十分らしかつた。私はそれを日當りのよい處に据ゑて、庭の隅から掘起した土を盛り、それを水にこねて、蓮を移し植ゑようとした。そこへ叔父がひよつこりやつて來た。漢籍や盆栽に親しんで日を送つてゐる叔父は、私の柄にもない仕事を見て、長い鬚を撫でながら笑ひ出した。そしてこんなことを云つた。

――蓮は秋に動かすものではない。春の彼岸頃、舊根が腐つて新芽が出だしたのを、逆樣に移し植ゑるのを以て法とする。併し、凡そ花卉のうちでも、水ものは最も栽培困難としてある。素人の育て方で、蓮の花を一つでも咲かせ得たら、それこそ園藝の天才である。――

私はその天才にならうと思つた。そして叔父の意見を參考にして、蓮を移し植ゑるのを翌年の春まで延ばした。すると圖らずも意外な便宜を得た。

私の家へ、田舍から時々野菜物などを持つて來てくれる農家の老人があつた。その老人が、蓮を育てたいといふ私の志望を聞いて、蓮にはこんな痩せた土では駄目だから、上等の肥えた土を進上しようといつて、やがて車に積んで土を運んで來てくれた。それは荒川岸の泥土で、壁土に用ひても最上等なものとかで、色は少し灰色がかつて、ねつとりとした重みのある濃密なものだつた。

「蓮田には及びもつかないが」

花卉

「それこそ園藝の天才である」

「上等の肥えた土」

荒川　アラカハ。秩父山中に發して東京灣に入る河。

私はそれに力を得た。春の彼岸になるのを待つて、小さな蓮鉢をひつくり返してみると、底の方に細い白根が腐らずに殘つてゐた。でも、それだけでは大きな鉢には足りないやうな氣がしたので、更に植木屋から、白蓮と紅蓮との苗を一株づつ取寄せ、その上田舍の老人に賴んで、普通の食用蓮の苗をも取寄せ、それらを逆樣に鉢の中へ植込んだ。そして植木屋から聞き知つた肥料として、大豆と乾鯡(ほしにしん)とを與へた。

所が、春がたけていつても、蓮の芽はなか／＼出なかつた。其の代りに、鉢一面に、ぎら／＼とした油が浮き、青褐色の苔が泥の面に擴つていつた。そして六月の初頃になつて、小さな蓮の芽が出だしたけれど、その卷葉が開きかけると、しなしなと横に倒れて、四五寸くらゐの大きさにしかならず、そ

「細い白根が腐らずに殘つてゐた」
苗—なへ。
大豆—だいづ。
「ぎら／＼とした油」

れもやがて緣の方から枯れていつた。そしてたゞ油と水苔とだけが、鉢の中一杯に漂ひ浮かび、泥の中からは泡が立ち、物の腐爛した臭氣が發散して、清淨な蓮の花も匂もその氣配だに見せないで、いぢけた小さな五六枚の葉だけが、枯れ殘つてゐるのみだつた。はじめ私は蓮を盛んに太らせるために、大豆を一合ばかりと乾鯡を七八本やつたのであるが、それが餘りに多過ぎて、蓮は肥料負けしてしまつたのである。私は悲しい氣持で、ぼんやり蓮鉢を見守るの外はなかつた。たゞ一つ私の心を慰めたことは、盂蘭盆の折、亡父と亡兒との位牌のある佛壇に、その蓮の葉を一枚供へることが出來たことである。

それだけのことを唯一の收穫にして、私はいつしか蓮鉢

「緣の方から枯れて」
腐爛
「その蓮の葉を一枚」
「蓮鉢を忘れがちになつた」

を忘れがちになつた。年を越して昨年の春、鉢の泥を半ば取換へてやらうかとも思つたが、それもつい不精から時期を過してしまつた。そして暖くなるにつれて、鉢の中は油ぎつてねち〱して來たが、それと共に一つ二つ蓮の卷葉が出だして來た。強すぎる肥料の沁みた泥土の中にも、根だけは生殘つてゐたものと見える。伸出した葉は、前年と同じやうに、小さないぢけたものだつたが、それだけにまた可憐でもあつた。私はもう、花は勿論大きな葉をも期待せずに、その小さな葉だけで滿足した。

七月の末から房州の外海岸へ行つて、一夏を其處で過した。盛んに繁茂してゐる蓮田を見ると、自分の貧弱な蓮鉢が思ひ出された。そして九月のはじめ家に歸つて來て、私は少

「小さな葉だけで滿足した」

房州　バウシウ。千葉縣安房郡。もと安房國。

からず驚かされた。いつの間にか庭の蓮鉢から、相當に大きな葉が七八本も眞直ぐに伸びてゐた。

たゞ悲しいことには、蓮の葉の裏面や柄に、油蟲が澤山群つてゐた。鉢の上の方に桃の一枝がさし出てゐて、それから傳播したものらしい。私は惜氣もなくその桃の枝を切り去つて、それを鏖殺してやつた。蓮の葉は勢を得たやうに、青々と茂つていつた。もう餘分の肥料も泥土に吸ひつくされたらしく、水がさつぱりと澄んで、青い藻まで生えてゐて、蓮特有の匂も、氣のせゐばかりでなく、實際に感ぜられた。それから霜時になると、枯蓮の趣も十分に見られた。

そして冬を越して、今年の春である。今日彼岸の入に、葉の覆を取去つてみると、鉢の泥は肥えて黑ずみ、水は冷たく澄

「相當に大きな葉が七八本も」

鏖殺

「水がさつぱりと澄んで」

「今日彼岸の入に」

みかへり、處々に枯葉の柄が殘つてゐる。今に其處から青々とした卷葉が伸び、それが圓く大きく擴つて、露の雫を宿す頃には、更に花の蕾が伸びて來て、夜明の光に音を立てて、ぱつと開くであらうなどと想像すると、私はうらゝかな春日のさす緣側に蹲つて、庭の蓮の鉢の方へ眼をやりながら、靜かな心で煙草をくゆらすのである。（豐島與志雄の文による）

長崎の盆の供養に行きあひぬひとつながさむあかき燈籠（與謝野　寛）

たなばたや簾の外なる香爐のけぶりのうへのあまの川かな（與謝野晶子）

蓮の臺

豐島與志雄　小說家。明治二十三年福岡縣に生まる。東京帝國大學佛文科の出身。現に同大學文學部講師たり。

與謝野寛　歌人。明治六年京都市に生まる。落合直文の門に入つて詩歌を學ぶ。慶應義塾大學講師。

與謝野晶子　歌人。前者の夫人。明治十一年大阪府に生まる。文化學院學監。

六　灯を消して

十一月二十八日の夜であつた。

第三軍參謀部の電話のベルがけたゝましく鳴つた。

「何か？」と、受話器を耳にあてながらいつたのが白井中佐。

「俺か。俺は白井ぢや。君は齋藤か。」

「ふむ、又失敗か。何！乃木少尉が戰死した！戰死したのか？どうして――傳令中に？さあ、それを將軍に言はんといふわけには行くまいし、よし〳〵何とかするよう。む〳〵、もう一度夜襲する。よし、弔ひ合戰をやつてくれ。さよなら。」

かういつて電話は切れた。

白井中佐は、受話器を手から離しもしないで、呆然として

十一月　明治三十七年。

ベル　電鈴。Bell.

白井中佐　名は二郎。第三軍參謀。今中將。

齋藤中佐　名は季次郎。第三軍參謀。後中將。

乃木少尉　名は保典。乃木希典の第二子。

「電話は切れた」

ゐた。眞黑な帷が彼を包んでしまつた。窓の外にはひゆうひゆうと寒い風が闇の中を吹いてゐた。時計を見るともう九時に近かつた。中佐はどうしようかと考へた。しかし、第一、戰況を報告もしなければならないので、思ひ切つて乃木大將の部屋へはひつて行つた。

部屋の中は眞暗であつた。大將はもう休まれたのかと思つて一寸躊躇した。しかし大將が火もつけないで部屋に居られることはいつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。休んででも居られるのかなと思つた。すると暗い中から「だれかい。」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか。何か用か。」

「眞黑な帷が彼を包んでしまつた」

躊躇

「暗い中から」

「戰況を申し上げに…………。」

かういふと、はつとマッチが光つた。大將の顏が蒼白く見えた。大將が蠟燭に火をつけられたのだ。蠟燭のしんがじいじいと音を立てた。

「戰況といふと?」

「二百三高地でございます。」

「うむ、どうだつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたと、齋藤參謀からいつて來ました。」

「さうか。――死傷はどのくらゐあつたな。」

「は、まだはつきりわからぬと思ひますが、すぐ調べまして…………。」

マッチ　燐寸。Match.

「顏が蒼白く」

二百三高地　旅順要塞背面の重要地點たる小丘。海拔二〇三米。

遺憾

乃木將軍

蠟燭の灯に照らされた大將の蒼い顏を見ると、それ以上のことは中佐の口からは漏しかねた。大將はぢつと灯を見つめたまゝ、何ともいはないで居られた。中佐は大將の顏を打守つてゐると、涙がこみ上げて來た。そして手足がぶるぶると震へた。

「死傷者をよく調べて下さい。」

大將が思ひ出したやうに、かういはれた。

「はい。」

「もうそれだけかい。」

「それに閣下、閣下の御令息は戰死されました。」

この一句は中佐の口から我ともなしに吐出された。何だか大將から引出されたやうに。

「ぢつと灯を見つめたまゝ」

「閣下の御令息は」

「何！保典が？さうか。」

かういふと、大將はふいと蠟燭の火を消してしまはれた。そして體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。中佐はぢつとそこを見つめた。しかしもう何の音もしなかつた。中佐は足を忍ばして外へ出た。

ごう〳〵といふ風の音が窓の外を通りすぎた。

保典少尉は友安旅團長の副官であつた。三十日の午後八時頃、旅團長が殘れる二中隊を提げて突撃するに決し、その命令を乃木副官に傳達させた。乃木副官は承つて塹濠內を前進中、額に銃彈を受けて即死したのである。

この報を電話で話したのが、軍の參謀――第一線の狀況視察のため二百三高地に出てゐた齋藤中佐であり、これを

「ふいと蠟燭の火を消して」
アンペラ　敷物などに用ふる下等なるむしろ。（印度語といふ）

友安旅團長　名は治延。後中將に進み、大正二年卒す。

「額に銃彈を受けて」

聞いたのが白井參謀であつた。

軍の高級副官吉岡中佐が、乃木少尉戰死の報を聞いたのは、白井中佐より少し後れてであつた。

吉岡中佐は津野田參謀に、どうしたらいゝだらう、將軍に話したものだらうかといつて、當惑してゐたが、結局津野田參謀が話すことになり、乃木さんの部屋に入ると、乃木さんはまた蠟燭に火をつけられた。

津野田參謀が恐る〳〵乃木少尉戰死のことを報告すると、この時は、

「そのことなら知つてをる。能く戰死してくれました。これで世間へ申譯が立つ。」といはれた。そして又火を消して、ごろり横に寢轉んでしまはれた。

吉岡中佐　名は友愛。後歩兵大佐に進み、明治三十八年、聯隊長として奉天に戰死す。

津野田參謀　名は是重。後陸軍少將に進む。昭和五年歿す。

「又火を消して」

津野田參謀は手持無沙汰に部屋を出て、吉岡中佐と二人して聲をあげて泣いた。

保典少尉は、師團の傳令將校として、比較的安全の職に置かうといふことになつてゐた。師團でも勝典中尉戰死のこともあり、いくらか保典少尉に目をかけてゐたのであつたらう。

（右）保典　（左）勝典

こんな話を少尉が耳にしたので、早速少尉は父大將へ手紙を書いた。

（前略）

「比較的安全の職に」

一、先日私自分にて荷分け致せし外、母上樣より御送附相成候マント、此の者に御渡し有之度願ひ上げ候。

二、又自動拳銃を第一聯隊の故兄上樣中隊へ送附の儀に付きて、私自身にて參り兼ね候に付き、何卒父上樣の御添書を頂戴仕り度く願ひ上げ候。

三、先日御話有之候私師團司令部へ參ることの話、歸營致し考へ候所、現今名譽多き野戰隊小隊長より殆ど非戰闘員に等しき職に轉ずる事に候間、直接敵に接して兄上樣の仇を報いん事も爲し得ず、且は何の特別の技能をも有せざる私が、選拔を受くるの理由なきに、比較的安樂なる位置に赴くは、他同期生に對し心苦しく、他にその適任者、例へば外國語をよくする者多きに對し、甚だ面白からず考へられ候故、或は此の御話の儀、御變更相成らざるや一寸御伺ひ申し上げ候。尤も御命令なればば致方も無之候へ共、せめて旅順陷落まで如何にか相成らざるものにや、御伺ひ申し上げ候。先は要事迄。

二十二日　　早々可祝

保典

父上座下

保典少尉が兄の仇を打ちたいといふ念願、それを讀んで大將は非常に喜ばれた。そして師團司令部へは取らぬやうにしてくれと師團長へいつてやられた。それで友安少將の副官になつたのであつたが、二百三高地で敢ない最期を遂

マント　Manteau.(佛)　一種の外套。

「兄上樣の仇を報いん事も爲し得ず」

「同期生に對し心苦しく」

「敢ない最期」

ぐるに到つた。

兄の仇を取りたいから第一線へ出して貰ひたい、特別の技能のないものを師團へ取るといふのは、友人に對しても情實があるやうで心苦しいといふ保典少尉の態度は實に立派なものである。こゝに父に對する親みの情が、紙外にあふれてゐるのを見て、そゞろに涙を催さしめる。

乃木大將が兩兒を失はれての後の心の淋しさはどんなであつたらう。この手紙を見ても父子の睦じさがよくわかる。勝典が死んでも、保典が死んでも、たゞさうかと多くをいはれなかつたが、心臟は張裂けるの思で居られたらう。

この父にしてこの子ありといふことは、實に乃木大將父子の如きをいふのであらう。（櫻井忠溫―「將軍乃木」）

催す――もよほす。

「この父にしてこの子あり」

櫻井忠溫　陸軍少將。明治十二年松山市に生まる。三十七八年の役に第三軍に小隊長として壯烈なる働きをなす。

七　銃

其の晩は殊に月がよかつた。

廣い草原は一面に夢のやうに烟つて、遠い廠舍の燈火がちら〳〵と見えた。そして原の眞中を帶のやうに横切つてゐる街道の、黑い松並木のあたりだけが、濃い闇を作つて居た。其處を町へ買物に出た馬方が唄を唄ひながら通るのが、仄赤い提灯の見え隱れするとともに、見えたり見えなかつたりした。遠く出してある兵の氣配は勿論、近處に居る自分の隊の歩哨の足音まで、月光の草の中にぼうつと包まれて、沈み果てたかのやうだ。

ぢい〳〵と蟲の音が滋く聞え出した。靜かな天地だ。

「殊に月がよかつた」

帶――おび。

「靜かな天地だ」

小哨の位置に、永野少尉は坐りこんで、先刻出した斥候の歸るのを待つて居た。今夜の演習計畫では此方が敵を夜襲する計畫になつて居るので、敵の陣地偵察のために、先刻丸山上等兵を長とした四人の斥候を出したのだが、彼等はどんなに早くても後三十分たゝなければ歸つて來ないだらう。

突然ぱつ〳〵と足音が聞えた。

「小哨長殿。」

「何だ、敵の斥候か？」

「いえ、丸山斥候です。清水が今崖から落ちて氣絶しました。」

「何つ、氣絶？何處で？」

「あの松林の向側であります。」

小哨 斥候　偵察　「足音が聞えた」　「何つ、氣絶？」

「よし、直ぐ行く。――おい、近藤軍曹、小隊の指揮をとれ。それから此の事をすぐ中隊長殿の處に報告してやれ。それから、一番左翼の叉銃の兵、集れ。何人か？四人。よし、驅足。」

驅足した永野少尉は、二十間ぐらゐ行つてから、氣がついたやうに立止ると、後を振向いて吩鳴つた。

「おい、近藤軍曹、中隊が前進するやうだつたら、その叉銃だけは、誰か一人殘して、番をさせて置け。」

向からも大聲の答が聞えて來た。

「承知しました。」

永野少尉は氣が氣でなく、驅けに驅けて其の場に行つた。斥候長の丸山上等兵と、もう一人の兵とが、一所懸命に清水の顏や頭に水をぶつかけたり、名前を吩鳴つたりして居た。

叉銃　「氣が氣でなく」

「どうした、まだ氣がつかないか。よし退け。おい、彈藥盒も何も取つてないぢやないか。すつかり取つてしまへ。それから今來たものは、みんな水筒を出せ。丸山、水を飲ませたか。」

「いえ、どうしても通りません。」

「どうして？」

「齒があきません。」

「齒が？よし、誰か劍を拔け。うむ、それを綺麗に拭け。」

劍を受取つた永野少尉は、これを横に清水の口に差込んで、少しづつこじつた。やつと少し開いたかと思ふと、後は樂樂と大きくあいた。水筒の水を口移しに、ぐつと吹込んで飲ましたら、届いたと見えて、やうやく「うん。」と呻るやうな聲を出して、息を吹返して來たらしい。

彈藥盒

「呻るやうな聲」

「おい、清水、清水。分るか。教官だ、永野少尉だ。」

目を洞のやうに開けた清水は、ぼんやり周りを見て居たが、また目を閉ぢた。丁度此の時、中隊長が特務曹長を連れて驅けつけた。

「おい、どうした。清水は氣がついたか。」

「え、今氣がついたんですが、また眠つてしまひました。」

「それはいけない。もう一度起して見ろ。それから、特務曹長、あの街道の茶屋に行つて、雨戸と蒲團を借りて來てくれ、よく事情を話してな。――誰か二人ばかり特務曹長と行け。」

中隊長が特務曹長に命令して居る間に、清水はまた息を吹返した。

「清水、中隊長も居るぞ。もう大丈夫だ。安心しろ。」

周り――まはり。

「中隊長も居るぞ」

息を吹返した清水が何か言つたが、中隊長や永野少尉には聽取れなかつた。けれど割合に近く、口の處に耳を持つて行つて居た丸山上等兵には、それが聽取れたと見えて、清水の耳の傍で大きな聲で呶鳴つた。

「なに、銃か？ 銃なら安心しろ。傷も何もついてないぞつ。」

集つてゐた凡ての人々に此の言葉が聞えた時、清水の言つたことが何であつたかといふことは、ぴんと響いた。

言葉を發するものは一人もなかつた。

死んだ様になつてゐる清水を取圍んで居る人達の顏色は夜目にも蒼白く見えた。清水の顏には、月が眞つ向にさし込んで、吹いた水滴の上にきら〳〵と輝いて居た。

重態の清水が、急造擔架によつて近くの衞戍病院に運ばれたのはそれから間もなくであつた。

「なに、銃か？」

「月が眞つ向にさし込んで」

衞戍病院

昏々と眠つて居る清水の枕元には、中隊長・永野少尉・特務曹長・班長等が集つて居た。斥候に出た清水の戰友も四人來て居た。急報によつて聯隊からも軍醫が來て、先刻診斷して行つた。さうして彼は今別間で病院の方の軍醫と何か話をして居る。

其の内に何か議が纒つたと見えて、軍醫は看護卒に命じて中隊長を呼びにやつた。中隊長は暗い顏をしてやつて來た。聯隊の軍醫が口を開いた。

「氣の毒ですが、あの兵は助らないだらうと思ひます。お話の通り、銃を護るために、落ちながらもそれを捧げて居たといふことですが、其の時彈藥盒を石に打つ突けて、したゝか

班長

看護卒

腹を打つたために、急激な腸捻轉を起したのです。明日の晝頃までに好くなれば別ですが、それでなければ、明後日の朝までは持ちません。それ〳〵適當な方法を講ぜられたがいいでせう。私も今夜は病院の方に泊りますから、何か異變がありましたら、遠慮なく起して下さい。」

中隊長は病室に歸つて來た。其の顏色を見て、清水の容態の餘程重大な事は、誰にも分つた。すぐさま急使は聯隊長と大隊長の許に飛んだ。家の方には急電が發せられたが、秩父の山のずつと奧に住んで居る家族は、とても間に合はないだらう。

大隊長はすぐ來た。聯隊長も少し遲れて見えた。二人とも一時間ばかりして歸つて行つた。聯隊長は歸り

「容態の餘程重大な事は」

際に、家族が來た時にはどんな面倒でも見るから、遠慮なく言つてくれと中隊長に申し添へておくのを忘れなかつた。

翌日になつた。

清水二等卒の容態は依然として變りがなかつた。

昨夜から一睡もしないで看護して居た將校や下士は、晝間二人づつ代り合つて寢た。中隊の方の演習も、やらないわけにはいかないから、中隊附の將校が代り合つて教練の指揮をした。

家族の者はまだ來なかつた。

午後聯隊から副官が來て中隊長に一枚の紙片を渡した。それには、右下に「陸軍步兵二等卒清水芳三郎」眞中に「上等兵ヲ命ス」として、左下に聯隊長の職官姓名が書いてあつた。初

「翌日になつた」

副官

職官　聯隊長は職。陸軍步兵大佐は官。

年兵がまだ第二期の檢閲も濟まない內に、一等卒となるのが既に異數であるのに、もう一つそれを飛越して上等兵となるなどとは、今までにない例であつた。

中隊長初め皆は、此の榮譽を病人の生前に知らせたいものと思つたが、既に視覺と聽覺との神經は其の働きを失つて、たゞ發聲の能力だけが僅ばかり殘つて居る病人には、何とも致し方がなかつた。たゞ枕元におくより外に仕方がなかつた。

其の晩九時頃、病人の容態が變つて來た。軍醫が飛んで來て、食鹽注射をした。枕元に集つて居るものは、默つて見て居るより外に何の施す術もなかつた。

突然病人が明瞭に言葉を發した。

「默つて見て居るより外に何の施す術もなかつた」

「銃は？……銃は？」

たつた二言。

暫くして脈を見て居た軍醫は、靜かに手を離して言つた。

「とう〳〵駄目でした。」

中隊長の眼には涙があつた。誰も彼も涙を流して居た。まして初年兵係の教官である永野少尉は、自分が死なしでもしたかのやうに、聲を放つて泣いた。それも無理はなかつた。初年兵係の教官として受取つた自分の赤ん坊の內を、一人取られたのだから。——中隊長は眼をおさへて廊下に出た。

月は昨夜のやうに明るく輝いて居た。

模範兵清水芳三郎の肖像は、今も中隊の食堂に掲げてあ

「たつた二言」

「月は昨夜のやうに明るく輝いて居た」

る。これは當時の中隊長が、その俸給から多額の金を割いて、某畫伯に賴んで描いて貰つて揭げたものである。そして中隊長は常に語つてゐた。

「此の肖像は自分の百の訓話よりもよい教訓を中隊に與へて吳れる。」と。

　そして、そのためか、此の中隊には、それ以來、銃器の取扱ひと射擊の上手な兵が、傳統的に出ると見えて、每年の射擊名譽旗は、大抵此の中隊が取るやうである。（久米正雄の文による）

〇

武士の命は義によりて輕し。

〇

鷹は羽を惜しみ武士は名を惜しむ。（格言）

「百の訓話よりもよい教訓を」

久米正雄　小說家。明治二十四年長野縣に生まる。東京帝國大學英文科の出身。

八　孤島より

　どんな境に僕が生きてゐるか、兎に角最近の生活の一片をお知らせしよう。それが第一だと思ふから。

　僕は先月の中旬から下旬まで十日間ばかり、或島の測量に出懸けた。或島として置く。僕等から言ふとそれは重大な意味のある事だが、詳しく言つたところで、北海道の地圖をひろげて調べて見る君とも思はないから。或は君の持つてゐる地圖には載つてゐないかも知れないから。

　案內のアイヌ人と、僕等四人とは、一艘の小さな船でその島に運ばれた。――極地に近い海に見る深碧な色と、その海

「最近の生活の一片」

測量

詳し――くはし

「地圖には載つてゐないかも知れない」

極地

の上に浮かんだ眞白な島――六月の中旬ではあるが、雪はまだ自分の消える日は來ないといふやうに眞白に横たはつてゐる、都會などでは見られない純白さをもつて。

アイヌ

僕等は第一に、海に近い一地點を選んで、持つて來た天幕を張る事にした。土地に馴れてゐるアイヌ人は間もなく、これを持つてゐて下さいと言つて、僕等のめい〱に一本づつの棒を渡した。それはこの島に生えてゐる柳の枝のかなり長く太い物である。

僕等はその枝を握つて、あたりを見廻した。と、何處から現

「都會などでは見られない純白さをもつて」

選ぶ――えらぶ。

れたこともなく、空の上に、此處へ來て初めて知つた眞青な顫へてゐるやうな空の上に、小さい眞黑な物がぽつ〱と、まるで何處からか飛んで來た鐵砲玉のやうに現れた。それはまた玉の飛ぶやうな速さをもつて僕等の頭の上に近づいて來た。そして見る〱鳥の形となつた。氣味の惡い、そして聞いた事も無いやうな鋭い啼聲であつた。アイヌ人の言葉によつてその鳥は鴉である事が知れた。

「來た〱。」と言ふと同時に、僕等は持つてゐた棒を高く振廻した、お呪でもあるやうに。

雪に蔽はれた島に棲んで、他處に移る事を忘れた鴉の群は、生きてゐる物が來たと見ると、それが何であるかもかまはず、總べて自分等の糧であるとして直ぐに啄みに來る。僕

「眞青な顫へてゐるやうな空の上に」

鴉

等は今彼等の糧とされようとしたのである。
天幕が張られた。僕等はその中にはひつて、先づ火を焚いて暖を取り、持つて來た食物を眼の前に並べた。

「今日は天氣がいゝから、櫻が見られるかも知れないよ。」

翌くる朝、土地馴れた同僚の一人は出がけに呟いた。

櫻？……何處に櫻などあるのだらう。全島は眞白に雪に包まれてゐるではないか。

僕等は雪を踏分けて出かけた。單調な雪の上の眺であつた。目的の地點に來ても誰も默りこくつてゐた。そして仕事に懸つた。

「やあ、櫻がある！」

「先づ火を焚いて」

「櫻が見られるかも知れないよ」

不意に同僚が叫んだ。僕はきよろ〳〵とあたりを見廻した。眞青な顫へるやうな空より外には何も見えない。怪しんで同僚の顏を見て、その眼の向かつてゐる方向を追ふと、そこには見ても氣のつかなかつた寂しい木がある。木と言つても、それはすい〳〵とした寂しい細い枝で、高さは三尺か四尺くらゐ。內地に卯木と言つて赤褐色の細い眞直ぐな枝ばかり簇生する木がある。丁度あれに似てゐる。

よく見ると、その枝には花が着いてゐる。花びらは薄く、形は櫻の花に似て、淡黃の花はその花を取卷いてずつと遠くひろがつてゐる眞白な雪のなかに吸込まれようとし、吸込まれて消えさうにして、有るか無きかのやうにその形を保つてゐる。

「見ても氣のつかなかつた寂しい木」

卯木

簇生

「雪のなかに吸込まれようとし」

「これが櫻かい?」

その花の側に立つた僕は、かう呟いて同僚の方へふり返つた。

「あゝ、君は北海道の櫻は初めてのわけだね。」

同僚は心附いてさう言つて、そしてその櫻について話をした。

その櫻は蝦夷櫻と言ふ。一年のうちたゞ一日、それも日のやゝ暖かみを帶びて來る正午頃に、ぽつと永い眠から目覺めたやうに花を開くが、午後二三時頃、日は照りながらも、夜の寒さの漂つて來る頃にはもう萎んでしまつて、それきり重ねて開く力もなくなつて散つて行つてしまふ。

その櫻の開く時には、何處から來るのであるか、鶯が來て、

「一年のうちたゞ一日」

その花の上で啼く。そして花が散るともう啼かない。

「氣を附けてゐたまへ、今日もきつと鶯が啼くから。」

ひつそりとした天地のなかに、僕は耳を澄ましてゐた。鶯は啼いた。朗かに二聲三聲啼いた。

もう食料品が盡きてしまひましたといふ意味の事を案内のアイヌ人が知らせた。

「あゝ、さうか。」と同僚は答へた。

言ふ者も、聞く者も平氣な顏をしてゐる。こゝで、この絶島で、食料が無くなる。側から聞いてゐた僕は寒さが身に沁みるのを感じた。無人島で、雪の外何一つ無い處で食料の盡きたといふ事は、死の宣告と同樣ではないか。

「ひつそりとした天地のなかに」

「寒さが身に沁みるのを感じた」

「これから獵に行く。君も行きたまへ。」

同僚がさう言ひだしたのは夕方で、この絶島の上に不思議な怖ろしい夜がまたも覆ひかゝらうとしてゐる頃であつた。

アイヌ人が先に立つ。僕等はあとから隨ふ。一行はまだ固く凍りついた雪を踏みつゝ、とある一方へと辿つて行く。

雪の上に一筋の流が現れた。青黑い水は音も無く流れてゐる。川の岸には、黄ばんだ芽をふき出した柳がひよろ〳〵と立つてゐる。アイヌ人はその岸に添つて流を遡つて行く。

僕等の立ちどまつた處は、流が細くて、そしてその流を挾んでゐる岩が空中で一しよに續いて、丁度自然の石門のやうになつてゐる處である。石門の奥は暗い。水は白く碎けつつ、つとその石門から現れて、もう暗くならうとしてゐる外光のなかに閃く。

凍る――こほる

「雪の上に一筋の流」

一人のアイヌ人はその石門のなかへはひつて行つた。その時には、僕等は手に手に柳の枝の折つたのを持つて、川の兩岸に別れて、相對して立つてゐた。

石門のなかから、アイヌ人の立てる聲が、その內面に反響しつゝ、陰に籠つた、不思議な、悲しい、唄とも呻きともつかない調子となつて流れ出る。次第にかすかになりつゝ流れて來る。

ばさ〳〵つといふ音が耳元でする。と何か白い物が僕等の目の前の空で躍る。鳥だ！と心附いた時には、めい〳〵手にしてゐた柳の枝をもつて、その鳥を目蒐けて打つてゐた。

「ばさ〳〵つといふ音が耳元で」

鳥は脆くも地に落ちた。

僕等は僅の間に四五羽の白い鳥を獲たのである。

アイヌ人は川岸から青草を摘んで來て、それを鳥の肛門に挿んだ。そして海の中に石を重しとして暫く沈めた。天幕を張つた側には、枯草の土手があつて、其處は雪が融けてしまつてゐた。火はその土手に放たれて、鳥は羽根のまゝ火の中に投込まれた。

鳥の燒肉の出來る頃には、アイヌ人は海の淺い處からしやくり取つたと言つて、笊に一杯の蠣を運んで來て、それをざら〳〵と火のなかにあけた。暫くすると蠣の一つ〳〵はぷつり〳〵とかすかな音を立てた。蠣の殼のなかに蠣汁が出來たのである。

海は音をしづめて、暗く遠く、他界にまでも續いてゐるらしい。ほの白く光る島は夜の海に柔かく展べられてゐる。寂として音のない天地は、このまゝ凍つて行くかと思はれる。たゞ青黒い空の底にかゝつてゐる星がちらり〳〵と動くので、こゝに一脈の生氣の流れてゐるのを感じるばかりである。

海と陸と接してゐる帶にも似た黑い地の上に、焚火が赤く燃えてゐる。二三のアイヌ人と、厚い防寒具に身を包んだ僕等とは、その焚火を圍んで、裂くと血の垂れる鳥の肉を食べ、蠣の殼からその汁を吸つてゐる。

濃い髯に顏を埋められた熊のやうなアイヌ人が、その顏を焚火に照らさせながら、腹が張つたので別に思ふ事もな

他界

「このまゝ凍つて行くかと思はれる」

「黑い地の上に、焚火が赤く」

埋む――うづむ。

いやうな眼をしてゐるのを見ると、不思議にも彼等が懐かしく感じられて來た。同胞だといふ感じが強く胸を衝いて來る。

焚火はとろ〳〵と燃え落ちて消えさうになつた。同時に闇は押寄せて來て、その火を奪はうとするかのやうに見える。僕はその時アイヌ人も同僚も、ぢつとその火を見守りつつ深い沈默に入るのを見た。（窪田空穗—「旅人」）

ほろ〳〵と霜解けあとの赤き土日に照らされて土手をこぼるゝ

むらさきの小草がくれのかよひ路をわれに見られし野の鼠かな（窪田空穗）

「同胞だといふ感じが強く胸を衝いて來る」

窪田空穗 歌人。名は通治。明治十年長野縣に生まる。早稲田大學國文科の出身。現に同大學の教授なり。

九 長江溯江記

長崎丸

我が長崎丸は、一時間十九浬の快速力をもつて、夜の瀬戸内海を走る。星明かに潮黑し。

船客の多くは讀書室にありて、或は家信を書き、或は款談す。八時、ラヂオ、好音を傳へて大阪放送局の『三十三間堂棟由來』を報じ來る。聽いていまだ半ばならざるに、突如、東京放送局の洋樂ありて雜り聞ゆ。洋樂の旋律やうやく微かに更に上海放送局のニュースを雜へ來る。安樂椅子に凭れつゝ、茶を喫し煙を吹いて、靜かにこの三放送局の放送を聽くことを得、亦面白し。浴を取つて睡る。

長江　揚子江をいふ。
長崎丸　日本郵船會社の汽船。神戸上海間の連絡航海に從事す。
「十九浬の快速力」
三十三間堂棟由來　サンジフサンゲンダウムナギノユライ。京都三十三間堂の緣起に見えたる事實を附會して作れる淨瑠璃。
旋律
ニュース　通信。報道。News.
雜ふ——まじふ

翌十日拂曉、我が船は既に關門海峽を越えて玄界の荒浪を蹴つて駛れり。海山の佳眺さながら畫の如し。海鷗數百、船を追うて來る。九時半長崎港に入る。上陸して先づ諏訪神社に賽す。

長崎名物のカステラを購うて船に歸る。

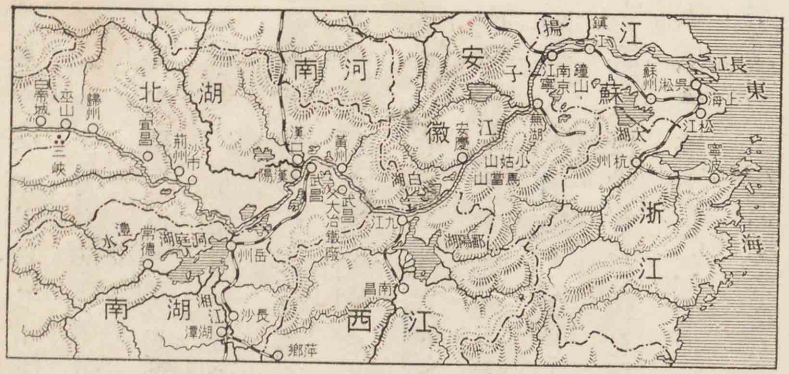
午後一時、錨を揚ぐ。船の無線電信局、警報を發して曰ふ。「低氣壓揚子江岸より襲來す」と。薄暮に至り果して烈風となり、怒濤山の如く激して舳を越え、煙突を掠め、後部の艫部に濺ぐ。船客皆醉ふ。一人として晩餐の卓に就く者なし。後に船長は連絡航海開始以來の難航なりしと語れり。吾等の如きは、胃の腑を絞りつくして吐くものもなく、簑蟲の如く毛布に裹まりつゝ、この夜の早く明けよかしと祈念するのみなりき。

十日　大正十五年三月。

諏訪神社　長崎市上西山町にある國幣中社。建御名方神・八坂刀賣命を祭る。

カステラ　和蘭語。Castilla.（地名）に起るといふ。

「低氣壓揚子江岸より襲來す」



上海

流石は東洋の大埠頭、上海の殷賑は、日本の一文士を驚嘆せしめたり。有體に言へば、大阪も神戸も東京も横濱も一籌、二籌、三籌は愚か數籌を輸せざるを得ざるを悲しむ。埠頭をはじめ市の商業區といはるゝ處の建築物の雄大なる、東京にある凡ゆる大建築を一箇所に寄せ集めて、始めてこれを髣髴せしむるに足るほどなり。東京にていふ山手邊の住宅地にても、何れも高壯なる建物にて、

上海　シャンハイ。揚子江の下流、黃浦口に臨める大都會。

「一文士を驚嘆せしめたり」

一籌

髣髴

世界列强の仲間入りをなせる我が日本も、この點だけは恥づかしき次第なり。

大馬路といふ大馬路は、電車を通じ、更に無軌道の電車ありて走れり。如何なる窄き道路といへども全部混凝土にて鋪装されあれば、軌道なくとも電車を走らせ得るなり。電車は頭等車と公衆車とを連結し、頭等車には紳士これに乗り、公衆車には一般民庶これに乗る。買ひたる乗車券は降車の際これを車掌に渡すを要せざるなり。別に汽車即ち乗合自動車あり。車體も美しく且大きく、人車は四辻に群屯し、馬車、自動車は織るが如し。

十字路上に、仁王の如く立てる帓帽黒衣の偉大なる印度人巡査が、黒白だんだらに塗りたる四尺ばかりの警杖を一

大馬路　ダイバロ。大通。
混凝土　コンクリートとよむ。當字なり。Concrete.
頭等車　トウトウシャ。特等車。
公衆車　コウシュウシャ。並等車。
帓帽

揮すれば、路行く人も、馬車も、電車も、自動車も、黄包車も、忽ちに停止して路を開く。

長江の月

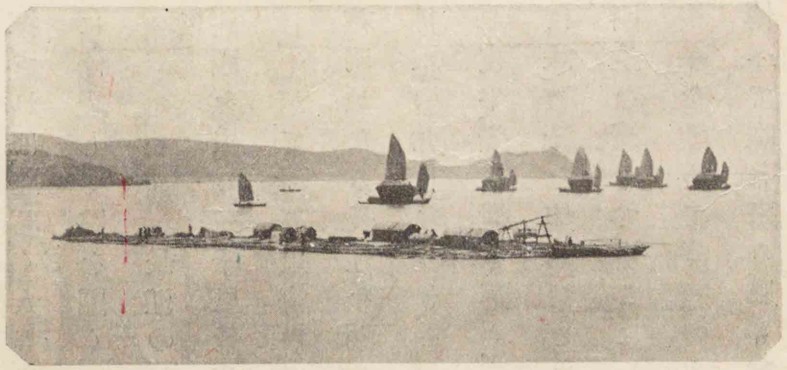
國を去る三千里、「鶯花の春を尋ねつゝ」、蘇州・南京に淹留數日、やがて再び上海の僑居に返りて、茲に行李を整へ、柳暗く花明かなる長江を溯りて漢口に向かふ。船は鳳陽丸、時は三月末の九日なりき。

夜半、船は纜を解く。舊暦十六夜の月隈なく照りて、晝見れば味噌汁を流したるにも似たる濁り江も、紫色の靄うすく四邊を籠めて、そこに一道の銀波の流るゝあり。欄干近く籐椅子を進めて、靜寂の夜氣にあたれば、青麥の香、菜花の香を傳へて吹き來る風も寒からず。折から下甲板の房艙より、如

黄包車　クヮウハウシャ。人力車のこと。
「鶯花の春を尋ねつゝ」
蘇州　支那江蘇省の都邑。太湖に臨む。
南京　揚子江中流の大都會。中華民國の首都たり。
淹留
僑居
柳暗く云々
漢口　揚子江の中流、漢水との合流點にある大都會。
鳳陽丸　日清汽船會社の汽船。上海・漢口間の定期航海に從ふ。
房艙

何なる人のすさびにや胡弓に合はせて歌ふ聲の刻まれ行く波に和して靜かに聞ゆるあり。

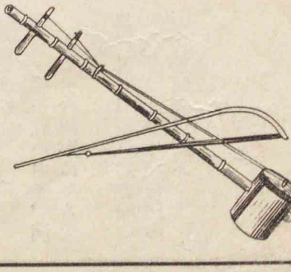
悠々たる大筏



揚子江の大筏

七日、午前十時洞庭湖を渡りて湘江を溯り、長沙・湘潭の風光を眺めんものと、武陵丸に乘ず。夜、洞庭に入る。

八日、曉四時、岳州を望み、やがて岳陽樓の下を過ぐ。岳陽樓は高さ三層、正面に岳陽樓の大額を掲げ、碧瓦折からの日に映えて、屋上に



胡弓

洞庭湖　漢口の上流にある大湖。

湘江　南嶺山脈中に發し北流して洞庭湖に注ぐ。

長沙　湘江中流の都邑。

湘潭　長沙の上流にある都邑。

武陵丸　日清汽船會社の汽船。漢口湘潭間の定期航海に從ふ。

岳州　洞庭湖と揚子江との連絡點にある都邑。

岳陽樓　岳州府城の西門の樓をいふ。

ある萬字の模樣靑光りに輝きたり。左右にも複樓ありて、さながら我が宇治の平等院の鳳凰堂の如し。この樓に登りて洞庭の湖を騁望すれば、實にや吳楚東南に坼け、乾坤日夜に浮かぶの大景を領略するを得べきなり。

わが船は、洸洋たる洞庭の大湖を渡りて針路を南に向けたり。實に空よりも廣きこの湖の、水嵩まさる秋の夜の月の眺は如何に。今は中水期とて、堆沙處々に丘を成して、人よりも高き葦生ひ、葦あるところ必ず蒲鉾小屋ありて、漁翁さびしく獨り栖み、終日四手網をおろして魚を捉ふ。時に大なる筏あり、船の行手を遮りて、靜かなる波に乘りて泛々として流れ來る。筏の上には茅葺の小屋の相向かひ相背きて並び、土を盛りて圃を作り、蕪・葱などの野菜を栽ゑ、鷄を飼ひ豚を

複樓

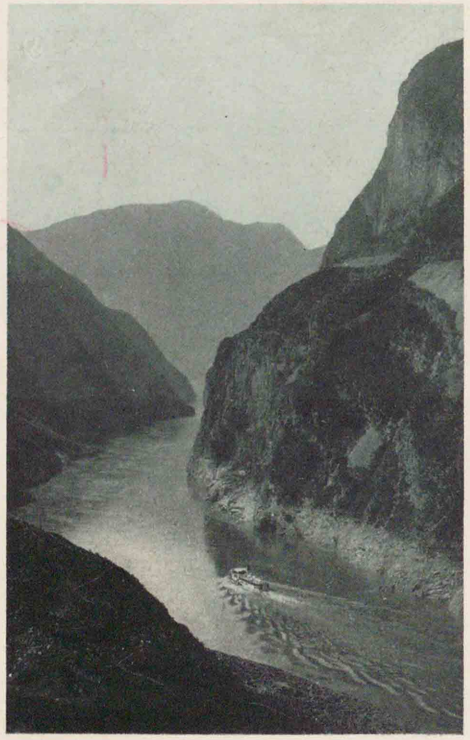
平等院　京都府久世郡宇治町にある天台宗の寺。藤原賴通の創建にかゝる。

騁望

吳楚云々　杜甫の詩に、「吳楚東南坼、乾坤日夜浮。」吳は東方楚は南方にあたる。古の地名なり。

洸洋

「漁翁さびしく獨り栖み」



（三峽）

湖　　江

養ふ。この筏は常德、湘潭等の湘江上流の地方より長江の下流に下り行くものにして、流に隨ひて漫々として下る。筏師の妻子と眷族とはその家長と共にこの筏の上に家を作り、比隣相睦びて樂しき水上生活を營むなり。時に水涸れて、筏の沙上に膠坐することあり。その時は水嵩の殖え來るまで其處に留る。

武陵丸の甲板に立ちて見渡せば、葦の間の沙洲の上に、茅葺の屋根の參差として散在するを見る。こは皆この沙洲に膠坐せる筏の、何時かは潮の來りて浮かばん日を待つ舟人の家の屋根にてありき。

三峽

三峽の壯大、崇高雄渾の大觀は、これを我が國に求むるに

常德　沅江に臨める都邑。

眷族

膠坐

參差

三峽　揚子江の上流。四川省に入る途中の名。

その匹儔なく、恐らく世界的の壯觀なりと稱すべし。

三峽とは歸峽・巫山峽・瞿唐峽を呼ぶものなれど、三峽の外、更に幾多の峽あり。急流噴迫し、盤渦を作して流るゝ灘に至つては、その間に無數あり。わが乘れる雲陽丸は速力十五浬、全速力をもつてして溯上すれど、萬馬並び奔る勢をもつて滾下する急流に阻まれて、一分時、二分時、時に數分時に亘りて一處に凝停し、少しも進まざることあり。此の際に於ける白頭の老船長と、老支那人の水先案内との緊張せる顏色は、さながら阿修羅のそれに似たり。煙突は赤く灼熱して、吐く煙は江を掩ふ。かゝるうちに、船脚寸を進め、尺を進め、終に奔流を劈いて上る。船首に起つ一丈餘の水烟は、敗れたる河伯が苦惱の具象なり。三峽を行く一日の行程に、此の如きもの

匹儔

盤渦

雲陽丸　日清汽船會社の汽船。宜昌重慶間の定期航海に從事。

「萬馬並び奔る勢」

阿修羅

河伯

具象

幾回なるを知らず。

峽のうちにて殊に壯大にして怪奇を極めたるは瞿唐峽なり。赭色に碧と白とを交へたる大岩峰の高さ三千尺より四千尺と註せらるゝが、殆ど直角を作して、左右に江を夾んで峙てる下、江の幅は僅に三四町、この大川の水を束ねて深さも知らず、峽中は阿波の鳴門を五十も百も寄せたるほどの大渦卷にて充たされて、その響萬雷の一時に鳴るに異らず。水の色、例の如く味噌汁のやうなればこそ船長も水先案內も船をやることを得れ、若しこの水にして、我が國の如く澄明なりせば、江底に亂立する岩礁に怖れおびえて、遂に一步も進むこと能ふまじと思はるゝなり。

瞿唐峽の峭崖の上に、大なる鞴形の箱を懸けたるあり。未

「殆ど直角を作して」

阿波の鳴門　四國と淡路島との間にある海峽。鳴門海峽。

鞴——ふいがう・ふいご

だ汽船の溯江開始せられざりし頃、船頭が追手の風を祈るため、鞴を江神に奉納したるなりといふ。この峽を一に風函峽と呼べるはこの故なりとぞ。

支那里程にして七百里、この間、這般の大景斷えて又續き、しかも王昭君の生まれたる香溪、屈原の故鄕の歸州、詩に名高き白帝城等その間にありて、遊客の思を千年の古に溯らしむ。

余は敢て再びいふ、三峽は實に世界的巨觀たるに恥ぢずと。（遲塚麗水—「新入蜀記」）

白帝城

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。
兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。（李　白）

「支那里程にして七百里」

王昭君　支那前漢時代の官女。名は嬙。匈奴の地に終る。

屈原　支那戰國時代の詩人。名は平。楚の人なり。

白帝城　支那四川省にある古城。

遲塚麗水　新聞記者。名は金太郞。明治元年靜岡縣に生まる。紀行文作家として名を獲たり。

李白　支那唐の詩人。太白と號す。杜甫と並びて、二大詩人と稱せらる。西紀七六二年歿す。年六十二。

一〇 海の旅

船は印度の南端を過ぎた。時とすると驟雨が印度洋へ來た。それがわれ〳〵の甲板へ吹込んだ。合奏のやうな海の音も聞えた。雨後は殊に蒸暑い。白い熱を帶びた雲が行手の空に起つて、そこにあるものは永遠の眞夏かと疑はせた。コロンボの近海で見られた漁船の影も隱れた。

ふと、波の間に一隻の汽船が見えた。われ〳〵の甲板からその汽船を認めたものは、いづれも欄干のところに立つて眺めた。

「あ、日本の船ぢやないか。」と、私は自分で言つて見た。その二本の檣で、その一本の煙筒で、われ〳〵の乘船に比べると、自

「永遠の眞夏かと疑はせた」
コロンボ　印度の南方洋上なるセイロン島の首都。Colombo.

ら構造を異にしたその黑い船の形で。

私は艫の方の太い綱の積んである甲板へ走つて行つた。そこから船を望まうとした。神戸出發以來われ〳〵の船と前後して、マルセイユへ向かふ郵船會社の汽船があつたから、波間に見るのもその船らしく思はれた。貨物を積むことが割合に少くて速力の多く出るエルネスト・シモンは見る間にその船に追付いた。遠く離れて來た故國を一つの船にして見せてくれるやうなその形が、恰も繪卷物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔てて、向の甲板に集る人の影までも望むことが出來た。果してそれが同胞であるや否やを見定めることは出來なかつたけれども、私はしきりに自分の帽子を振つて見た。

マルセイユ　佛蘭西の南地中海に面する港。Marseilles.
郵船會社　日本郵船會社。
エルネスト・シモン　作者の便乘した佛蘭西の汽船。
「故國を一つの船にして見せてくれるやうなその形」

間もなく、エルネストーシモンは、その船を後に殘して進んで行つた。遠く、遠く後方に殘して。海はまた砂漠のやうな空虛に返つた。鳥一羽、船一隻、何一つ私の眼に入るものは無かつた。われ〳〵の船がシンガポールを離れた頃はまだそれほどにも思はなかつたが、いよ〳〵印度の南端も過ぎ、コロンボもはや後方になつた時、何となく私も心寂しさを感じて來た。故國の消息が絶えてから既に二十二日經つた。

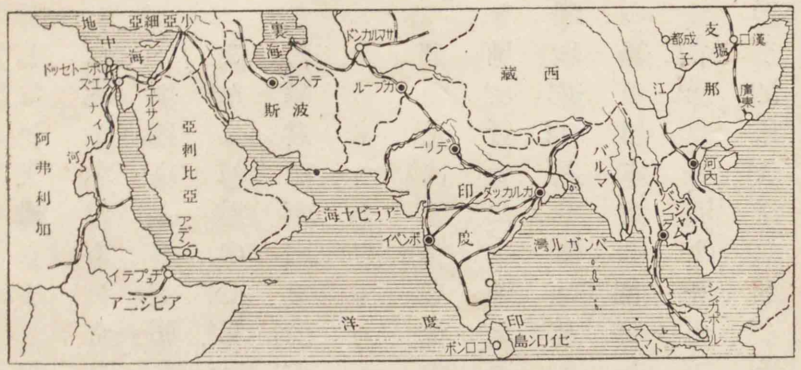
船はアラビヤの海へ入つて行つた。そこには油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は幾樣かの渦と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影は海に映るほどの日で、その靜かさは熱帶らしい靜かさであつた。どうかすると波間に群れ飛ぶ銀色の飛魚を見た。未だ曾て望んだことのな

「海はまた砂漠のやうな空虛に返つた」

シンガポール　馬來半島の最南端にある港。Singapore.

消息

皺――しわ。



いやうな夕陽に燃える火の海をも見た。

「失禮ですが、私はMといふものです。コロンボからこの船に乘つて參つたものです。」と、私の側へ來て、名刺をくれた日本の絹商があつた。こんな外國人ばかりの中で、珍らしい同胞に逢つて、國の言葉で話が出來ようとは、全く私も思ひがけないことであつた。

「そんなら、あの食堂の側の廊下で荷物を開けていらしつたのは貴方

「夕陽に燃える火の海」

珍らし――めづらし。

「國の言葉で話が」

でしたか。失禮しました。私は日本の方だとは思ひませんでしたよ。」と、私があからさまに言ふと、M君は、
「いや、私はよく支那人に間違へられます。」と快活に答へた。こんなM君の心易い調子がいかにも旅慣れた人らしかつた。M君は商用で倫敦に行くのだとのことであつた。

日の光はアラビヤの海に滿ちて居た。人を避けて私は海を見に行つた。一切を忘れさせるものは海だ。躍れ、躍れ、海よ、躍れ。舷に近く白い大きな花輪を見るやうなのは、われ〳〵の船の起す波の泡であつた。忽ちその泡が近い波の上へ擴つて行つて、星のやうに散亂れて、やがて痕跡も無く消えて行つた。私は遠く青く光る海の彼方に、無數の魚の群かとも

あからさま

「一切を忘れさせるものは海だ」

泡——あわ。

思はれる波の動搖をも認めた。條理もなく、筋道もない海。先蹤もなく、標柱もない海。豐富で、しかも捉へることの出來ないやうな海。何處を發端とも、何處を終末とも言ひ難いやうな海。私の眼に映るものは、唯日の光であつた。波の背に反射する影であつた。藍色の波の上に浮揚つて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相擊つて時々揚る水煙であつた。光と、熱と、波とは殆ど一つに溶けあつて、私は自分の身體までその中へ吸はれて行く思をした。

大船の心安さ。私は波打際の砂の上に身を置くやうな、海から離れた心持をもつて、しかも岸から窺ふことの出來ない海の懷をまのあたりに近く見て行つた。卷きつゝある。開きつゝある。湧きつゝある。起りつゝある。奔りつゝある。放ち

條理
先蹤

「海の懷をまのあたりに近く見て行つた」

つゝある延びつゝある狂ひつゝある亂れつゝある競ひつつある溢れつゝある釀しつゝある流れつゝある止りつゝある轉びつゝある陷りつゝある渦まきつゝある波は波の中に滑り入りつゝある搖れつゝある震へつゝある觸れつつある擊ちあひつゝある混りあひつゝある逆立ちつゝある連なりつゝある續きつゝある。

長い廊下のやうな甲板から眺めると、少し斜になつた欄干の線があだかも遠い水平線と擦れ〳〵になつて、或は水平線の方が高くなつたり、或は欄干の線の方が高くなつたりするやうに見えた。どうかすると青い深い海はその板の間まで這上がつて來るやうにも見えた。波の動搖に身を任せてゐた私のすぐ足許まで。

赤黑い禿山を望むやうな、ところ〳〵に石の現れた、荒寥として、しかも乾き切つた、「死の島」とも呼んで見たい幾つかの島の影が海の上に現れた。われ〳〵の船では、乘客は皆甲板の上に總立ちになつた。早速雙眼鏡を取出したものもあつた。

「アフリカが見えて來ましたぜ。」と、傍らに立つM君が私にいつた。

全く知らない人達の中に入つて來た私も、どうやらアフリカの海岸に近い處まで漕付けることが出來た。航海の季節によつてはなか〳〵骨が折れると聞くアラビヤの海をも、さほど熱苦しい思もせずに通過して來た旅の幸を祝つ

荒寥

「死の島とも呼んで見たい幾つかの島の影」

アフリカ　Africa.

た。ヂュブティへ石炭を積みに寄るといふ前の晩は、船では盛んな晩餐會があつた。われ〳〵の食堂も、港毎に客の數を增して、ヂュブティに着く頃には五十人を越して居た。皆互に盃をあげ、かちりと觸合はせて航海の無事を祝つた。

陸を待受ける待遠しさが皆の心にあつた。翌日の午後になつて、初めてアフリカの陸らしいものが見えて來た。船は水蒸氣の多い、風の多い、白い光の滿ちた海に入つて行つた。赤く禿げたアフリカの沿岸が次第にはつきりと現れて來た。人々は早くヂュブティの港へと願つて居た。

ヂュブティはアデンの海峽を隔てて、丁度あの英領の港と相對した位置にある。そこまで行くと、何となくスエズも近づいた氣がする。鷗がわれ〳〵の船に近く飛んで來て鳴いた。小船を漕いで近寄つて來る土人もあつた。白い駝鳥の羽根・煙草・小刀・槍・土人の齒を白くする楊枝の類を賣りに來る手合が、小船から船梯子を傳つて、われ〳〵の甲板の方へ上がつて來た。一口に土人と言つても、こゝのはアビシニヤ人だ。忽ちわれ〳〵の周圍は、白や赤の布の頭巾や、熱い感じのする腰巻や、恐ろしく光つた眼や、氣味惡く卷き縮れた髮や、安南でも印度でも見られなかつたほどの、黑いと言つても黑い皮膚の人達で滿された。

「黑鬼はこゝから來たもんですよ。」と、M君は笑ひながら冗談をいつた。

一方にアフリカ、一方にアラビヤ。その二つの陸の間を進

ヂュブティ　アフリカの東北岸。紅海の入口。佛領。Jibuti.

「陸を待受ける待遠しさ」

アデンの海峽　紅海の口を扼する海峽。Aden. 正しくはバブエル・マンデブ海峽といふ。Bab-el-Mandeb.

英領の港　アデン港をいふ。

スエズ　紅海の北端。スエズ運河の入口。Suez.

アビシニヤ　アフリカの東北隅にある獨立國。Abyssinia.

「黑いと言つても黑い皮膚」

んで行つて、夜が明けた時には、水蒸氣が多く、その日の午後から殊に冷え〱として來た。子供を連れた母親は幼いもののために薄い肩掛を取出すほどの陽氣であつた。私は風の無い海の上に、遠く光る河のやうな波の反射を望んで居た。動搖して定りの無い波の岡、波の谷、波の小山をも望んで居た。波と波との私語を聞いて居た。急に涼しい風が滿ちて穩かな航海であつた。

一日は一日より涼しくなつて、スエズも近づいたといふ頃は、急に外套を取出して夏服の上に重ねるものすらあつた。氣の早い人々はマルセイユの港に着いた時の下相談などを始めて、見物や宿泊やそれから食事の仲間に加ることまでを、私のところへまで勸誘に來た。

「殊に冷え〱として來た」

さびしい一軒屋のやうな燈臺が見えて、紅海の領分も漸く狹く、終に近づいて來た。エジプトの岸の方を見ると、白く黄ばんだ日あたりの中に、小さな村落らしい人家も望まれた。そのあたりには樹木も何も無かつた。スエズは間も無くであつた。

海は微笑んだ。そこには明るい海があつた。柔かい海があつた。少し黄味を帶びて、しかも底青く透きとほるやうな泳いでも見たくなるやうな海があつた。長い船旅の疲勞を身に感じながら、日に燒け潮風に吹かれつゞけて、漸く私はスエズの港に辿りついた。國を出た日から數へると三十一日目であつた。

エジプト　アフリカの東北にある國。Egypt.

「海は微笑んだ」

船へはエルサレムの畫帖を賣りに來る土人もあつた。そこゝに赤い土耳古帽や白い布の頭巾などの見られる碇泊中の混雜の中で、私はM君と一緒に甲板の欄干の方へ行つた。そこに二人で手を置いて眺めた黃ばんだ明るい波の動搖は言ふに言はれぬ快感を與へた。白い鳥の翼をひろげたやうなのは、ヨットのやうに輕い古風な帆船だ。桃色・灰色・白などの雅致のある色彩を並べて塗つた船の一つがエジプト人を乘せて、われ／＼の眼前を近く通り過ぎた。

「古代のエジプト人などが、商品を積んで往來したのも、この海でせうね。」M君はさすがに商人らしく遠い昔を偲ぶやうに言つた。

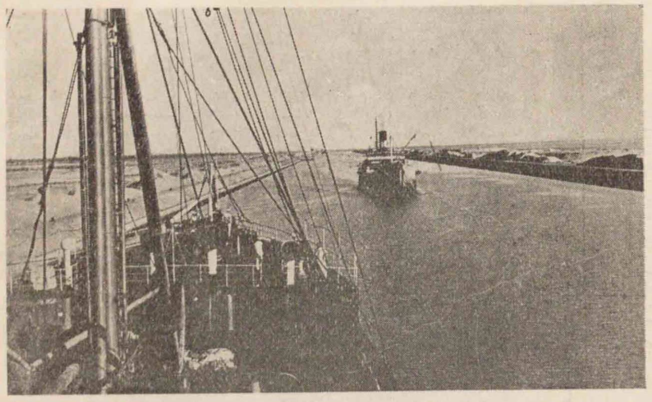
翌朝早く、われ／＼の船は、スエズの運河へと港を離れた。

エルサレム　地中海の東方、アラビヤの北方にあるパレスチナの首都。Jerusalem.

ヨット　快走艇。輕快な小形西洋帆船。Yacht.

「古代のエジプト人などが」

そして名高い掘割の入口にさしかゝつた。乘客は皆勇み立つた。もうポート・セッドに行つたも同じやうなものだ。この喜が單調な船の動搖に倦んだ人々の顏に讀まれた。運河の兩岸は呼べば答へるほどの位置にある。十三ほどある船着場が一つ／＼靜かに眼前に展けて行つた。時とすると船は湖水の中を通りぬけて、また徐々と掘割を進んで行つた。若葉に包まれた人家も見えた。遠く砂原續きの丘陵の起きたり伏したりして居るところ／＼に、



スエズ運河

ポート・セッド　スエズ運河の北口にある港。Port-Said.

僅に短い草や灌木を見るやうな、兩岸の眺望は私の疲勞を忘れさせた。私はエジプトの岸の見える方にも行き、アラビヤの岸の見える方にも行つた。そして白く黄ばんだ砂まじりの土の上に、駱駝を牽いて來て休んでゐる土人の影も見た。不思議にも日はそれほど暑くなかつた。綿のやうに浮かんで居る雲の形までが、何となく故國の方の空の樣子に似て居た。

船がポートセッドに着いた時、私は再び、離れて來た故國の氣候にめぐりあつた。

（島崎藤村―「海へ」）

夏の月舷梯にボート搖られつゝ　晋風

「離れて來た故國の氣候にめぐりあつた」

島崎藤村　詩人・小說家。名は春樹。明治五年長野縣に生まる。明治學院の出身。

晋風　俳人。本名は勝峰晋三。明治二十年東京市に生まる。東洋大學の出身。

一一　木精

森鷗外

巖が屛風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見つけて喜ぶのはこゝの谷間である。フランツはいつもこゝへ來てハルロオと呼ぶ麻のやうなブロンドな頭を振立てて、高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまつて、ぢいつとして待つてゐる。

暫くすると、大きい鈍い最低音で、ハルロオと答へる。

巖―いは。

深山薄雪草

フランツ　Franz.

ハルロオ　叫び聲。おうい。Hallo.

ブロンド　金髮。Blond.

高音

「ぢいつとして待つてゐる」

最低音

これが木精(こだま)である。

フランツはなんにも知らない。只暖かい野の朝、雲雀が飛立つて鳴くやうに、冷たい叢の夕、蟀蟋が忍びやかに鳴くやうに、こゝへ來てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれるのが嬉しい。木精に答へて貰ふために呼ぶのではない。呼べば答へるのが當り前である。日の明るく照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落すために立つてゐるのではない。立つてゐれば影がさすのが當り前である。そして其の當り前の事が嬉しいのである。

フランツは、父が麓の町から始めて小さい沓を買つて來て穿かせてくれた時から、こゝへ來てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答へないことはない。

「其の當り前の事が嬉しいのである」

フランツは段々大きくなつた。そして父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間例の巖の前へ來ずにゐた。

或日の朝である。山を一面に包んでゐた雪が巓にだけ殘つて、方々の樅の木立が綠の色を現して、深い〳〵谷川の底を水がごう〳〵と鳴つて流れる頃の事である。フランツは久し振で例の巖の前に來た。

そして例のやうにハルロオと呼んだ。

麻のやうなブロンドな頭を振立てて呼んだ。併し聲は少し「さび」を帶びた次高音になつてゐるのである。

呼んでしまつて、ぢいつとして待つてゐる。

暫くして、もう木精が答へる頃だなと思ふのに、山はひつ

「雪が巓にだけ殘つて」

次高音

そりして、なんにも聞えない。只深い〳〵谷川がごう〳〵と
鳴つてゐるばかりである。
フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が
時間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くぢいつとし
て待つてゐた。
木精はやはり答へない。
フランツはぢいつとして、いつまでも待つてゐる。
木精はいつまでも答へない。
これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈は
ない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなか
つたのではないかと思つた。
フランツは前より大きい聲をしてハルロオと呼んだ。

「只深い〳〵谷川がごうごうと鳴つてゐるばかり」

「いつまでも答へない」

そして又ぢいつとして待つてゐる。
もう答へる筈だと思ふ時間が立つ。
山はひつそりしてゐて、ごう〳〵といふ谷川の音がする
ばかりである。
又前に待つたほどの時間が立つ。
聞えるものは谷川の音ばかりである。
これまでは、フランツは唯不思議だ不思議だと思つてゐ
たばかりであつたが、此の時になつて、急に何とも言へない
ほど心細く寂しくなつた。譬へばこれまで自由に動かすこ
との出來た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じであ
る。痲痺の感じである。痲痺は一部分の死である。死の息が始
めてフランツの頭に觸れたのである。フランツは痲のやう

「又ぢいつとして待つてゐる」

「何とも言へないほど心細く寂しくなつた」

痲痺

なブロンドな髪が一本々々逆に立つやうな心持がして、何を見るともなしに身の周りを見廻した。目に觸れるほどのものに、何の變つた事もない。目の前には例の巖が屛風の樣に立つてゐる。日の光がところ〴〵霧の幕を穿つて樅の木立を現してゐる。風の少しも無い日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えてゐた樅の木立が又隱れる。谷川の音の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛の頸に懸けてある鈴であらう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、ぢいつと考へてゐる。餘り不思議なので、夢ではないかと思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。

暫くしてフランツは、何か思ひ附いたといふやうな風で、

「何を見るともなしに身の周りを見廻した」

「何か思ひ附いたといふやうな風で」

「木精は死んだのだ。」と呟いた。そしてぼんやり自分の住んでゐる村の方へ引返した。

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精の事が氣に掛つてならないので、又例の巖の處へ出掛けた。

此の日丁度、午過から極く輕い風が吹いて、高い處にも、低い處にも團(まる)がつてゐた雲が、少しづつ動き出した。そして銀色に光る山の嶺が一つ見えて來た。フランツが二度目に出掛けた頃には、嶺といふ嶺が、藍色に晴れ渡つた空にはつきりと描かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帶びた紅に匂ふのである。

フランツが例の巖の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑やかに聞えた。小さい時から聞馴れた、大きい鈍い最低音の木

「同じ日の夕方」

精の聲である。

フランツは「おや、木精だ。」と、覺えず耳を欹てた。そして何を考へる隙もなく駈出した。例の巖の處に子供の集つてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリューネットな髮をしてゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。フランツはつひに見たことのない子供の群を見て、氣兼をして立止つた。

子供達は皆ぢいつとして木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んでしまふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。

勇ましい底力のある聲である。

暫くすると、木精が答へた。大きい大きい聲である。山々に

「覺えず耳を欹てた」

ブリューネット　帶黑色。Brünett.

「血色の好い丈夫さうな子供」

「勇ましい底力のある聲」

響き、谷々に響く。

空に聳えてゐる山々の巓は、此の時あざやかな紅に染る。そしてあちこちにある樅の木立は、次第に濃くなる鼠色に浸されて行く。

知らぬ七人の子供達は皆ぢいつとして、木精の聲尻が微かになつて消えてしまふまで聞いてゐる。どの子の顏にも喜の色が輝いてゐる。其の色は生の色である。

群を離れて矢張ぢいつとして聞いてゐるフランツの顏にも喜が閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

フランツは何と思つてか、そのまゝ踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

鼠──ねずみ。

「そのまゝ踵を旋らして」

歩きながらフランツはこんな事を考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達がそこに住んでゐるといふことだ。あれは大方その村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないので、木精が死んだかと思つたのは間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。今度呼んで見たら答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巓は最後の光を見せて、とう／＼闇に包まれてしまつた。村の家にちらほら燈火がつき始めた。

（森鷗外―「鷗外全集」）

「自分は呼ぶことは廢さう」

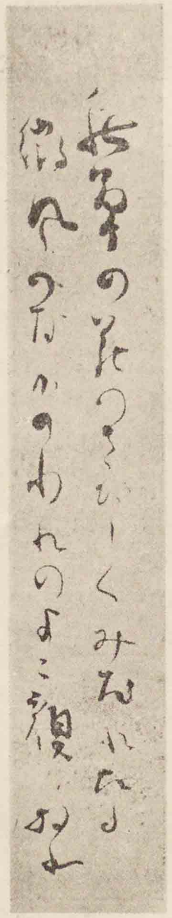
森鷗外 文學博士・醫學博士。名は林太郎。石見國津和野に生まる。東京帝國大學醫科の出身。陸軍軍醫總監・東京帝室博物館長・帝國美術院長等に歴任せり。大正十一年歿す。年六十三。

一二 廢れたる園（歌評）

廢れたる園に踏みいりたんぽゝの白きを踏めば春たけにける

北原白秋

何といふ上品な美しい歌であらう。



若山牧水筆蹟

つと、とある庭園に足を踏みいれると、そこら一杯たんぽゝが咲亂れてゐる。その花を踏みつゝ立つてゐると、嗚呼、もう春も暮れるのだといふ、暮春の感じが油然として胸の底から湧上がつて來るといふのである。

北原白秋 歌人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生まる。早稻田大學英文科に學ぶ。以下四首北原白秋の作。

秋草の花のさびしくみだれたる微風のなかのわれのよこ顔　牧水

暮春

まことに、言葉に一分のたるみもない。「踏みいり」などといふのも、決して不用意に使はれたものではない。單に「入りゆき」などといふのでなく、「踏みいり」とあるので、其の時の作者の心が何かしら興奮して、いら〳〵してゐたらしく感ぜられる。「白きを踏めば春たけにける」といふのでも、そのやゝ硬い古風な言ひかたのなかに、言ひ知れぬ緊張と、しいんとした氣持とが含まれてゐるではないか。

いつしかに春の名殘となりにけり昆布乾場のたんぽゝの花

ある海邊にての作。

ぶら〳〵と散歩の途か何かに、とある荒磯の昆布乾場に

「言葉に一分のたるみもない」

出た。ふと見ると、そこらに一つ二つたんぽゝの花が咲いてゐる。「おゝ、もういつか、これが春のなごりとなつたのかなあ。」といふ意味であらう。單純な歌ではあるが、これなどは最も私の愛誦する一首である。昆布の採れるところといへば、どうせ荒磯である。その乾場は砂の上か、岩の上か、いづれにせよ、とげ〳〵しい荒砂か、眞黑な岩の上かと見てよからう。其の時、昆布が干してあつたか如何かはとにかく、いづれ昆布の切れや、貝殼などがそこらに散亂してゐたに相違ない。渚にはかなりな浪が斷えず碎けて居り、霞みながらも、沖の方には大きなうねりが動いてゐる。其處へぼんやりと立入つて見ると、これはまた思ひがけなく、黃色い花が砂をあびて、其處此處に咲いてゐる。過去つた春を思ふ心に燃えてゐる

「單純な歌ではあるが」

愛誦

貝殼——かひがら。

「春を思ふ心」

眼に、その二三の可憐な花が、ほんとうに、どんなに強く映つたことであらう。

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出

畑には青い幹と葉とを思ふさま生ひ伸ばして、蜀黍が高高と茂り合つてゐる。夏の初の靜かな夕方で、その葉先にはもう露でも宿りさうだ。折しも月はこの廣漠たる平原のはての低い空に、漸く黄な色を鮮かにして、照りそめようとしてゐる。其處に一人の少年が佇んでゐる。手足の細い、色の青白い病兒である。晝間からたつた一人で、しきりにほそ〴〵とハモニカを吹きならしてゐたのであつたが、もう夜にな

ハモニカ Harmonica.

らうとするのに、一向氣もつかぬげに、猶しんみりと幼い單調な樂器を唇頭から離さうともしないといふ敍景の歌。同じことでも、たつぷりと新味を湛へて歌つてある。

石がけに子ども七人腰かけて河豚を釣り居り夕やけ小やけ

夕燒小燒は、よく子供たちが夕燒のした時に唄ふ歌である。それをそのまゝ持つて來てゐるのだが、それがいかにもよく調和してゐて、わざとらしくないばかりか、その句があるために、夕燒小燒のした海邊の崖に、多くの子供が一心になつて魚を釣つてゐる景色が、はつきり水の滴るやうに歌ひ出されてゐる。

敍景

「たつぷりと新味を湛へて」

「よく調和して」

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔あり我を笑はしめざり　　石川啄木

事々しく取出して言ふほどのことでもないが、此の頃、自分の心の奥には、人知れず氣にかゝつてゐて離れない一つの悔がある。あゝせねば善かつた、あれは全く自分が悪かつたと思ふ。それが、事につけ、折にふれ、斷えず氣がかりになつて、今は氣輕に笑ふことをすら許されなくなつたといふのである。かうしたことは、誰にでもよくある事である。大概の人は、かういふ時には、自分で自分の心を瞞着して、或は無雜作に打忘れて、その悔を悔とせずに通してしまふ。併し、この作者はさうではなかつた。自己に對して何處までも眞面目

石川啄木　歌人。名は一。岩手縣の人。朝日新聞記者。明治四十五年歿す。年二十七。以下三首石川啄木の作。

悔——くい。

「誰にでもよくある事」

瞞着

な作者の性格は、此處にも窺はれるであらう。

新しきからだを欲しと思ひけり手術の傷の痕を撫でつゝ

この歌は、啄木が晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作で、意味は説明するまでもなく明かで、眞に何氣ない風に歌つてあるが、生まれもつかぬ傷痕をもつ人の痛ましい心がよく表はれて居る。その「新しきからだを欲し」と歌ひ出して、「傷の痕を撫でつゝ」としみ〴〵とした姿を描いて居るのに注意しなければならない。又、この歌では單に肉體の傷であるが、心に傷を負うた場合にも、人はやはりこのやうな感を抱かずには居られないだらう。さういふ風にして見ると、

「何氣ない風に」

この歌にはなか〳〵深い味ひがある。

稀にあるこのたひらなる心には時計の鳴るもおもしろく聽く

自分としては極めて珍らしいこの平靜な心には、平生聞馴れてゐる時計の音までが如何にも興味深く聞きなされるといふのである。この歌を味はふと、深い大洋の底に、一尾の魚が靜かに尾鰭を收めて、ぢいつとしてゐるかのやうな、靜かな懷かしい印象を受ける。さうして、かうした場合にあつた作者を想像することによつて、我等はおのづと我みづからを懷かしむ心の涌いて來るのを覺える。

尾——び。

「靜かな懷かしい印象」

や、や、朝鮮服が立つて居り白くぼんやりと朝のみなとに　　土岐哀果

かうした調子の歌は珍らしい。朝鮮海峽を夜の間に渡つて、ほどなく釜山に上陸しようといふので、夜の引明けの甲板に出て、舳の方を眺めて立つて居ると、次第に港は近づいて來る。その港の岸に、「や、や、居たぞ、朝鮮服が。」といふのである。嚴密に言へば、三十一文字にはなつてゐないが、自然に出て來た聲の調子の中に、却つてそれよりもよく調つた節まはしがある。（若山牧水の文による）

幾山河越えさり行かばさびしさの果てなむ國ぞ今日も旅行く　（若山牧水）

土岐哀果　歌人。名は善麿。明治十八年東京市に生まる。早稻田大學英文科の出身。現に東京朝日新聞記者。

釜山　フザン。朝鮮半島の南にある港。下關との間に連絡船あり。

「自然に出て來た聲の調子」

若山牧水　歌人。名は繁。宮崎縣に生まる。早稻田大學英文科の出身。昭和三年歿す。年四十四。

一三　轡十文字

良澤・玄白等は打連れて觀臟の場處へ往つた。刑場の一部に蓆を以て粗末な假小屋が設けられてあつた。手醫師が與力や何かと一緒に待つて居た。

やがて一人の老屠は出刄を手に持つと、無造作に屍體を切開いて往つた。胸が第一に切割かれた。良澤も玄白もターヘルアナトミアの胸の繪圖を開いて、開かれて往く屍體の胸と一心に見比べてゐた。それが良澤と玄白とに取つて何と不思議であつたらう。出刄の切先に切られて行く骨の一つ一つも、筋の一つ一つも、肉の間に網の如く走つて居る白い奇怪な線條も、白く浮上がつて居る脂肪も、胸郭一ぱいに擴つて居

良澤　蘭學者。前野氏。豐前中津藩醫。中津侯に仕へて江戸に居り、青木昆陽に蘭學を學び、後長崎に遊學す。享和三(二四六三)年歿す。年八十一。
玄白　蘭學者。杉田氏。若狹小濱藩の醫。西玄哲・山脇東洋に學ぶ。最も意を外科に用ひ、解剖に精し。文化十四(二四七七)年歿す。年八十五。
刑場　江戸の千住小塚原の刑場。
手醫師
與力　ヨリキ。德川幕府の時諸奉行の配下に屬して、內外の諸事に當れる卑役。
老屠
ターヘルアナトミア　和蘭の解剖書。解體新書の原本。

る肺も、左肺の下から覗いて居る眞赤な桃の實のやうな心臟も、ターヘルアナトミアの繪圖と一分一點の違もなかつた。良澤も玄白も、他の人々も、深い感歎のために聲も出なかつた。續いて腹が剖かれた。そこに見出された胃、奇怪な形にうづくまつて居る腸、腸胃の陰に隱れてゐる名も知らぬ臟腑まで、和蘭圖と寸分の違もなかつた。

老屠が出刄を持つ手を止めると、良澤は始めて我に歸つたやうに叫んだ。

「至極ぢや、至極ぢや。蘭書の繪圖と寸分の違もござらぬ。和漢千歳の諸說は、皆取るに足らぬ妄說と定り申した。醫術はもはや和蘭に止めを刺し申した。」

「至極ぢや、至極ぢや。」

「至極ぢや、至極ぢや」

皆は良澤の感激に聲を合はせた。

刑場からの歸途は、良澤・玄白の他に、玄適と淳庵とが連立つてゐた。四人は同じ感激に浸つて居た。それは奇妙不思議な和蘭の醫術に對する讃歎の心であつた。刑場から六七町の間、默々として銘々自分の感激に浸つて居たが、淺草田圃にさしかゝると、淳庵は堪へかねたやうにいつた。

「今日の實驗只々驚き入るの外はない事でござる。かほどの事を、これまで心付かずに打過してゐたかと思へば、この上もなき恥辱に存ずる。我々醫をもつて主君に仕へる者が、その術の基本とも申すべき人體の眞形をも心得ず、今日まで一日々々とその業を務め申したかと思へば、面目もない事でござる。何とぞ今日の實驗に本づき、大凡にても身體の

玄適　蘭學者。小杉氏。
淳庵　蘭學者。中川氏。德川幕府の醫官。
淺草田甫　今東京市淺草區淺草公園の北方の地。當時は一面に田甫なりき。
「身體の眞理を辨へて」

眞理を辨へて醫をいたさば、醫をもつて天地間に身を立つる申譯にもなる事でござらう。」

良澤も玄白も玄適も、淳庵の述懷に同感せずには居られなかつた。玄白はその後を承けていつた。

「いかにも尤の仰せぢや。それにつけても、拙者は如何にも致して、このターヘルアナトミアの一卷を飜譯いたしたいものぢやと存ずる。これだに飜譯いたし申さば、身體内外のこと分明を得て、今日以後療治の上にも大益あることと存ずる。」

良澤も心から悟つたものの如く、

「いや杉田氏の仰せ尤でござる。實は拙者も年來蘭書を讀みたき宿願でござつたが、志を同じうする良友もなく、歎き

「如何にも致して」

思ふのみにて日を過してござる。もし各方が志を合はせくださらば、何よりの幸ぢや。幸ひ先年長崎留學のみぎり、蘭語を少々は學んでござるほどに、それを種といたし、共々このターヘルアナトミアに讀みかゝらうではござらぬか。」といつた。

　玄白も淳庵も玄適も、手を拍つてそれに同じた。彼等は異常な感激で結び合はされた。

「然らば『善は急げ。』と申す。明日より拙宅へお越しなされい。」

良澤はその大きい眼を輝しながらいつた。

　約の如くその翌日を初として、四人は平河町の良澤の家に月五六回づつ相會した。良澤を除いた三人は、和蘭文字の二十五字さへ最初は定かに覺えて居なかつた。良澤は三人

「明日より」

平河町　今東京市麴町區。

の人々に蘭語の手ほどきをした。彼はさすがに長崎へ留學した事があるだけに、多少の蘭語と章句語脈のことも少しは心得て居たけれども、それは殆どいふに足らなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に教へる事はもう何も殘つて居なかつた。

　三人の手ほどきが濟むと、四人は初めてターヘルアナトミアの書に掛つたが、開卷第一の頁から、たゞ茫洋として舵なき船の大洋に乘出したやうに、何處からとも手の付けやうがなく、あきれにあきれて居る外はなかつたが、二三枚めくつた處に、仰向けになつた人體全象の圖があつた。彼等は考へた、人體内景のことは知りがたいが、表部外象のことは、その名處も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符

「多少の蘭語」

茫洋

「舵なき船の大洋に乘出したやうに」

號と、文の中の符號とを合はせ考へることが一番取付き易いことだと。

彼等は眉・口・唇・耳・腹・股・踵などに付いて居る符號を、文章の中にさがした。そして眉・口・唇などの詞を一つ〳〵覺えて往つた。

が、さうして單語だけは分つても、前後の文句は、彼等の乏しい力では一向に解しかねた。一句一章を春の長き一日考へ暮しても、彷彿としてあきらめられないことが屢〻あつた。四人が三日の間考へぬいて、やつと解いたのは、「眉とは目の上に生じたる毛なり。」といふ一句だつたりした。四人はそのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘々嬉し涙の眼の中ににじんで來るのを感ぜずには居られなかつた。

あきらむ

「四人が三日の間考へぬいて」

眉から目と下がつて鼻の處に來たときに、四人は「鼻とはフルヘッヘンドせしものなり。」といふ一句に突當つてしまつた。無論完全な辭書はなかつた。たゞ良澤が長崎から持歸つた小冊子に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは「木の枝を斷ちたる後、そのあとフルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土集りてフルヘッヘンドをなす。」といふ文句だつた。四人はその譯註を引合はせても容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド、フルヘッヘンド、フルヘッヘンド。」

四人は折々この言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合はせたまゝ、一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上がるや

「フルヘッヘンドせしものなり」

「巳の刻から申の刻まで考へぬいた」

うにしてその膝頭を叩いた。

「解せ申した、解せ申した。方々かやうでござる。木の枝を断ち申したるあとは癒え申せば、うづたかくなるでござらう。塵土集ればこれもうづたかくなるでござらう。されば鼻は面中にあつて堆起するものでござれば、フルヘッヘンドはうづたかしといふ意でござらうぞ。」といつた。

四人は手を拍つて喜び合つた。玄白の眼には涙が光つた。彼の喜は連城の璧を獲たよりも勝つて居たが、神經などといふ言葉に至つては、一月考へ續けても分らなかつた。彼等は最初難解の言葉に接するごとに、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んで居た。初め一年の間、どの頁にも、どの題にも、轡十文字が無數に散在してゐたが、彼等の

「面中にあつて堆起するものでござれば」

連城の璧　趙の惠文王卞和の璧を得。秦の昭王十五城を以てこれに易へんと請ふ。これより連城の璧といふ。

「轡十文字」

先驅者としての勇猛精進はすべてを征服せずには居なかつた。一箇月六七回の定日を、怠なく守つた甲斐があつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も明かに、書中の轡十文字も殘少く掻消されて居た。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る喜で酬いられて居た。語句の末が明かになるに隨つて、次第に蔗を食ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に染みついて來た。

彼等は邦人未到の學問の沃土に、彼等のみが足を踏入れ得る喜で、會集の期日ごとに、兒女子の祭見に行く心地で、夜の明けるのを待ちかねるほどになつて居た。

（菊池寛の文による）

「先驅者としての苦闘」

「先驅者のみが知る喜」

次第に蔗を食ふ　晉書に「顧愷之毎食甘蔗、常自尾至本、人或怪之、愷之曰漸入佳境」

菊池寛　小説家。明治二十二年高松市に生まる。京都帝國大學英文科の出身。

一四　近江聖人

中江藤樹先生は、俗稱を與右衞門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生まれ、學、王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。

先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと先生の墓所小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向かひ、「先生の墓所は。」と問へるに、農夫は、「畑道なれば知れ申すまじ。案內致し參らせん。」とて、士人を導きて行きけり。ほどなく小さき藁屋の前に出でけるが、「しばし待ち給へ。」とて農夫は內に入り、やがて出で來るを見れば、木綿の新しき著物のうへに、紋附きたる羽織を著たり。士人は驚きて、さても丁寧なる男かなと思ひて、附きて行くほどに、やがて墓所に到りぬ。農夫は竹垣の戶を開き、「いざ入りて拜し給へ。」といひて、その身は戶外に退きて恭しく拜伏せり。士人はこの樣を見て再び驚き、さては衣服を改めたるは我に對するためにはあらで、先生を敬するためにてありけるよと思ひつきければ、農夫に向かひて、「汝は藤樹先生の家來筋の者なるか。」と問ひぬ。農夫は詞を改めて、「さには候はず。されどこの村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるものなし。『我等が親なれば、子々孫々、必ずその御恩を忘るべからず。』と、わが父母常に敎へ候ひき。」と答へたり。士人はそのはじめ、只何となく一見せんとの心にて來れるが、この農夫の擧動によりて、俄

中江藤樹　儒者。名は原。世に近江聖人と稱す。慶安元(一三〇八)年歿す。年四十一。
江州　ゴウシウ。近江國。
大溝　滋賀縣高島郡。今は町。
小川村　高島郡。今靑柳村に屬す。
王陽明　明の大儒。名は守仁。良知の說を立てて一世の師表たり。西曆一五二九年歿す。
尾州　ビシウ。尾張國。
墓所　靑柳村小川の玉林寺中にあり。

「紋附きたる羽織」

「子々孫々、必ずその御恩を忘るべからず」

に敬慕の念を起し、懇にその墓前に禮拜して歸りきとぞ。

この一事、以て先生の徳行のいかに高くして、またその化育のいかによく下に及びしかを見るに足らん。

中江藤樹筆蹟

熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に從ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取りあげて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、いそぎ榎木に走り行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面

化育

熊澤蕃山　名は了介。備前侯池田光政に仕へ、庶政を整ふ。元祿四(一三五一)年歿す。年七十三。

致ス良知ヲ

河原市　滋賀縣高島郡。

榎木の宿　滋賀縣滋賀郡。

「金二百兩あり」

して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取出して返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、「もしこの二百兩なくば、わが一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に行はれん。さればこの恩なか〳〵言葉のいひ盡くすべきにあらず。まづ當座の御禮までにこれを贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける顏色にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふことかあるべき。」とて、手にだに取らず。

色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故、止むことを得ず十兩となし、五兩となし、三兩となし、段々減じて遂には金二歩となし、「せめてこればかりは。」と、理を盡

蘇る——よみがへる。

「大いに驚ける顏色にて」

二歩　ニブ。今の五十錢。

くし詞を盡くしていふに、「この金を受くるほどならば、二百兩をも留め置くべし。それだにかく返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるはわが心にあらねど、餘りに餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべき所を、こゝまで追ひかけ來れる賃錢なり。わが取るべき錢なれば申し請くべし。」といひて、二百文を懷にして歸らんとす。

飛脚は感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに、「名ある者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。只わが在處の近くに小川村といふ處あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜每に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き申したるに、親には孝を盡くすべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふ

「鳥目二百文を賜へ」

氏——うぢ。

こと、常に語り給ふにより、今日の金子もわが物にあらざれば取るべき理なしと心得たるまでの事なり。」といひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命活きのびて、各〻方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山をりふし田舍よりのぼり居て、學問修業の最中なりけるが、この物語を聞きて、その人こそ誠の儒といふものなれとて、翌日すぐに江州に行きて、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、「人に教へ申すほどの學德なし。」とて、更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間先生の門にたゝずみて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、「よしや、ま

「辛き命活きのびて」

儒

「人に教へ申すほどの學德なし」

づ內に入れ申せよ。」とあるに、辭みがたくて內に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、「門人熊澤といふものあり。御役にも立つべきものなり。」とて蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

（橘南谿—「東遊記」による）

水にて朱を溶けば其の色赤く、綠青を溶けば其の色青くなる。本來水の色は赤くも青くもなけれども、朱・綠青に交はりてかくの如し。其の如く、本來人心に變りはなけれども、其の生まれ育ちたる國・處の風俗・其の家の所作に染りて、色々に變りあり。學問にても同じことなり。先づ本心を考へ定めて其の上にて學ぶべし。（中江藤樹の文による）

備前侯　岡山の城主池田光政。學を好み、心を政治に用ひ、賢君の名あり。天和二（二三四二）年卒す。年七十四。

橘南谿　宮川氏、名は春暉。伊勢の人。醫を業とし京都に住む。東西を漫遊し、足迹海內に周し。文化三（二四六六）年歿す。年五十四。

（野火止の用水）

苦心の跡

一五　野火止の用水

東京の西北數里に野火止といふ處がある。今は埼玉縣北足立郡大和田町に屬してゐるが、見渡す限り打續く畠の間には、森あり丘あり流あり、春は菜の花麥の緑、秋は薄の波雜木の紅葉、武藏野の面影が今に殘つてゐて、見るからに野趣に滿ちた眺である。昔此の附近一帶の地は、彼の智慧伊豆といはれた松平信綱の領地で、其の菩提寺平林寺も此の野火止にある。

平林寺の門をくゞつて、薄暗いばかりに茂つた楓の下を進むこと約一町、本堂について右折すれば、杉や檜の生ひ茂つてゐる林の奥に、信綱の靈は靜かに眠つてゐる。敷石の苔

野火止　埼玉縣北足立郡大和田町の字。

「武藏野の面影が今に殘つてゐて」

野趣

松平信綱　松平正綱の姪にしてその嗣となる。徳川家光に仕へ伊豆守に任ぜらる。始め武藏國忍城を賜はり、寛永十六（二二九九）年川越の城主となる。寛文二（二三二二）年歿す。年六十七。

平林寺　野火止にある臨濟宗の寺。金鳳山と號す。

を踏んで此處に詣でる者は、あたりの靜けさを破つて、玉の如き水が勢よく流れてゐるのを見るであらう。有名な野火止の用水とは卽ちこれで、此の水を引くに就いては、面白い話が今に傳へられてゐる。

元來野火止一帶の地方は、土地高く水利に缺け地味瘠せて、見るからに貧しい村であつた。信綱が川越城主として此處を領してゐた時、代官安松金右衞門は、新に堀を掘つて玉川の水を引けば必ず田畑が出來ると申し出た。其の費用の見積を尋ねると、三千兩あればよいといふ。當時の三千兩は非常な大金であるが、信綱は此の爲に後世まで利益を享けることが出來るならばと、直ちに堀を掘ることを安松に命じた。安松は命を奉じて數百人の人夫を督し、いよ／＼工事

「面白い話が今に傳へられてゐる」

代官
安松金右衞門　信綱の臣。川越の代官たり。

「非常な大金であるが」

に着手した。そして今の中央線立川驛の北方一里許りの處から、此の野火止を過ぎ、志木町の新河岸川(しんがしがは)まで六里の間に堀を通じて、玉川の水を引くことにした。

工事はやがて見事に落成したが、併し意外にも一滴の水も流れて來ない。信綱は之を見て安松を詰ると、安松はとにかく明年までの猶豫をと願ひ出た。が、翌年になつても水はやはり流れて來ない。こゝに至つて信綱は、安松が地勢の高低を考へずに工事を進めたものとして、其の手落を責めたが、安松は尙自分を信じて疑はない。元來此の附近は土地が乾き風が烈しいために、これまで非常に土埃が多く、客のある場合には必ず座敷を掃いて入れなければならなかつた。然るに今年はそんな事が全くない。のみならず野菜の出來

立川驛　東京府北多摩郡立川町。
志木町　埼玉縣北足立郡。
新河岸川　荒川の支流。川越市附近より、志木町を經て、內間木村にて荒川に合す。

「意外にも一滴の水も流れて來ない」

のよいことも例年と異なつてゐた。これは水分が地を潤してゐるためで、確に彼の堀のお蔭に違ないと、そこで安松は、何とぞ更に一年の猶豫をと願ひ出た。然るに翌年の夏、一夜大雨が降ると、奔流が水音高く進み來て、忽ち六里の堀に漲つた。信綱は始めて安松が自ら信ずることの強いのに感歎し、且厚く其の功を賞したといふ。

草秀で木茂り、見渡す限り豊かな田畑の間を過ぎて、平林寺に詣でる者は、たゞに春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今なほ流れて盡きぬ用水に對して、安松金右衞門が當年の苦心を偲び、この事業に功績のあつた人々に深い感謝を捧げなければならない。（國定讀本による）

「何とぞ更に一年の猶豫を」

「今なほ流れて盡きぬ用水」

一六　草の匂

一雨夕立が來さうな空模樣でした。砂ぼこりの立つ野道を急いでゐると、一人の農夫が氣忙しさうに苅草を掻集めてゐるのに出會ひました。高い草の匂がぷん〳〵四邊に散らばつてゐました。それを嗅ぐと私の歩みは自然に遲くなりました。私は牡牛のやうに大きく鼻の孔を開けて、胸一杯に空氣を吸込みました。

言はうやうのないなつかしい草の匂。その前に立つと、私は一瞬のうちに、蓬・萱・野菊・犬蓼・杉菜・露草、――といつたやうな、苅倒された草の名を數珠つなぎに思ひ浮かべて、それぞれの草の持つてゐる容姿や、踏まれても、引きちぎられても、

「高い草の匂」

「それ〴〵の草の持つてゐる容姿や、……」

伸びずにはおかないその生命を嗅ぎ知るばかりでなく、どうかすると、それらの雜草の齒ざはりまで味はひ得たやうな氣持がするのです。私は生まれつき牛の愚鈍と正直と辛抱强さと一緒に、牛の嗅覺をも持つてゐるのかも知れません。今一つ牛の持つてゐる大きな胃の腑があつたなら、私は彼等と同じやうに、極端な菜食主義者となつたかも知れません。私は實際さう信じてゐます。

草に對するかうした親みは、どこから來たものでせう。

私にとつて草は、よしそれがどんなに小さいはかないものであつても、それは地に潛んでゐる生命の芽であります。生命といふものは、それがどんなに氣まぐれな徒らな表現をとつても、そこには美があり、力があり、光輝がありますよ

「雜草の齒ざはりまで」
菜食主義者
「地に潛んでゐる生命の芽」
表現

ろづの物のなかで、草に現れた生命ほど謙遜で、素朴で、正直で、そして辛抱强いものは、たんとありますまい。草こそは私にとつて、この上もない不思議な存在であります。蹄がないばかりに、同じところに立止つてゐる小さな獸であります。聲帶がないばかりに、沈默を續けてゐる小さな鳥であります。

しかし私の草に對する親みは、それのみに因ることではありません。

私は子供の頃草の中で大きくなりました。もつと適切にいつたら、草と一緒に大きくなりました。田舍の寂しい村に生まれて、友達といつても僅しか持たなかつた私は、その僅な友達と遊ぶ折には、いつも草の中を選びました。友達の居

「蹄がないばかりに」
「聲帶がないばかりに」
「草と一緒に大きくなりました」

合はさない時は、一人ぼつちで兎のやうに草の上を轉げまはつてゐました。草には花が咲き實がなつてゐましたから、私はそれと一緒に遊ぶことが出來ました。指に吸着く朝鮮朝顔の花や、ちよつと觸はると、蟋蟀のやうにぴち〳〵鳴つて莢のはぜる鳳仙花の實などは、子供の私にとつて心からの驚異で、私はどれだけの長い時間を、それによつて遊ばせて貰つたか知れません。

草のなかには、またいろ〳〵な蟲が隱れてゐます。軍人のやうに尻に劍を持つてゐるきり〴〵す、長い口髭を生やした蟋蟀、氣取屋の蟷螂、剽輕者の屁つ放り蟲、おけら・蚯蚓・機織・土蜘蛛、——といつたやうな、お伽の國の王樣や小姓達の氣忙しさうなまた悠長な生活がそこにあります。草の葉を搔

はぜる
「子供の私にとつて心からの驚異」

「お伽の國の王樣や小姓達」
小姓

分け、莖を押曲げて、そのなかに隱されてゐる小さな俳優達のお芝居を覗き見するほど、私にとつて制しきれない誘惑はありませんでした。彼等は覗き見する私に氣がつくと、びつくりして慌てて逃出しました。氣短な奴は私の指に食ひついたり、細い毛脛でもつて私の額を蹴つたりしました。

いつでしたか、京都御所の苑內を、上田敏氏と連立つて散步したことがありました。苑內の芝生には萌出たばかりの新芽が、美しく日に輝いてゐました。フランス好きの此の詩人は、それを見るにつけて、直ぐにあちらの事を思ひ出すらしくいひました。

「日本の草は感じも手觸りも硬いのが多いやうですが、フランスの原つぱに生えてゐる草は、みんな柔かで、それに蟲

上田敏　文學博士。東京の人。東京帝國大學英文科の出身。東京高等師範學校・京都帝國大學の教授に歷任す。詩人として名あり。大正五年歿す。年四十四。

なんか滅多に見つからないのが、氣持がようござんすね。」

私はそれを聞いて、都會で育つた此の詩人と、田舍で生まれた私との間に、草や昆蟲に對する感じの上に、大きな間隙があるのに氣づかないではゐられませんでした。蟲は時々私の指を嚙み、肌を螫しました。しかし彼等はいつも私の遊び友達でした。

蟲ばかりか、草も偶には人間に向かつて白い齒を見せることがあります。萱は剃刀のやうな葉で、幾度か私の指を切りました。薊はその針で、度々私の掌を刺しました。しかし私はいつどんな場合にも、これらの草を見ると、

「おい、兄弟……。」と、いきなり呼びかけたいほどの親みを失つたことはありません。よしそれが砂ほこりに汚れてゐようと、朝露に濡れてゐようと、それはほんの些細な事に過ぎないのです。

遊ぶものと、遊ばせてくれるものと、成長するものと、成長させてくれるものと、——私と草との關係は、かうして離れられない間柄であつただけに、今夕立前の野道で思ひがけなく苅草の匂を嗅いで、暫くはそこに引留められたやうな譯でした。

矢のやうな銀線を描いて、大粒の雨がばら〳〵と落ちて來ました。農夫はあわてて苅草を背負つて駈出しました。私もその後を追ひました。

（薄田泣菫の文による）

草を打つて蛇に驚く。（俚諺）

「都會で育つた此の詩人と、田舍で生まれた私との間に」

白い齒を見せる

「いきなり呼びかけたいほどの親み」

「離れられない間柄」

薄田泣菫 詩人。名は淳介。明治十年岡山縣に生まる。隨筆作家としても名あり。

一七　擊滅

「新來の敵艦隊に對しては誓つてこれを擊滅して、宸襟を安んじ奉ります。」

御下問に對し、聯合艦隊司令長官東鄉大將は、かう奉答された。列席してゐた山本海軍大臣・伊東軍令部長は、その餘りに斷定的な奉答振りに、思はず大將の顏を見詰めたといふことである。苟もしない大將が、たとへ自信があるにもせよ、かうした思ひ切つた奉答をされたのは、勿論それだけの覺悟がなくてはならない。その節隨伴してゐた第二艦隊司令長官上村中將が、控室に退つてから、大將に覺悟のほどを訊ねたところ、大將は慨然として、

「誓つてこれを擊滅し」
宸襟
東鄉大將　名は平八郎。弘化四年生まる。現に元帥・海軍大將たり。
山本海軍大臣　名は權兵衛。嘉永五年生まる。現に海軍大將たり。
伊東軍令部長　名は祐亨。元帥・海軍大將たり。大正三年薨ず。年七十二。
上村中將　名は彥之丞。海軍大將に進み、大正九年薨ず。年六十八。

「叡慮を惱まさせ給ふ聖顏を拜しては、あゝ奉答する外ないではないか。」と答へられたとのことである。成程、聖顏を拜して、大將が一層決心の臍を固められたには相違なからうが、如何なる場合たりとも、自信のないやうな事を輕々しく奉答するが如きは、大將の斷じてなさない所である。卽ち大將は敵に對する勝算は、やはか違ふべきとの大信念の下に奉答されたものと私は確信する。日本海に於て敵艦隊を擊滅した我が全勝の士氣は、既にこの御前における奉答中に嚴存し、神機もまた冥々の裏に活躍してゐたのである。

何時の時代の、何處の戰役においても、かりそめにも一方の指揮官たる者で、勝たなくてもよかつた者は一人もない。が、日本海々戰直前の我が司令長官ほど、責任の重い場合は

叡慮
聖顏
やはか
信念
「我が全勝の士氣は、…」
神機
冥々の裏
かりそめにも

滅多にあるまい。五分五分の勝負は勿論、七分三分の勝を得たとしても、まだ責任を盡くした事にはならないのである。もし新來の敵艦が浦潮に入つたとしたら、朝鮮海峽は絕えずその脅威を受けて、三十萬出征の我が陸軍は、後方聯絡の安定を得ず、媾和の期も遙かに遲れたであらう。かう觀察してくると、全勝者たらねばならぬ東鄕大將の奉答は、當然すぎるほど當然なものとなつて來るのである。併しこゝに今一つ大將の確信を裏書する有力な證據がある。それは開戰の當日、哨艦から敵艦隊出現の警報に接した際、大將は大本營に「直ちに出動、これを擊滅せんとす。」と電報された。全勝の自信なくして端的に擊滅などと言ひ切れるものではない。これに徵しても大將の覺悟は明々白々で、その偉大さは寧

脅威
「全勝者たらねばならぬ」
端的
明々白々

ろこゝに存すると思はれる。

然らば、大將はどうしてそれほどまでの自信を得られたのであらうか。

大將は御稜威と臣民の忠誠とによつて生ずる天祐・神助を確信せられた。國家としても個人としても、至誠によつて磨きだされた正義の光は、必ず神界の明鏡に映じ、その反射が天祐となり神助となつて、人界に下るといふのが大將の信仰基調であるやうに思はれる。

「天祐と神助とに由り。」と筆を起した大將の日本海々戰詳報は、敬恭莊重の氣全文に溢れ、讀者をして肅然たらしめずんば已まないものがある。就中「これを擊滅することを得たり。」の一句に至つては、大將が出發の際、御前における御下問

「至誠によつて磨きだされた正義の光」
敬恭莊重

に對し、「誓つてこれを撃滅して、宸襟を安んじ奉る。」と奉答した所を果し得たもので、誠忠無二な大將の胸中には如何の感があつたらう。私はこれを忖度して、名狀し難い念に驅られ、知らず識らず涙が滲み出るのである。

（小笠原長生の文による）

剛は毅くして物に屈せざるをいふなり。操は我が義とする志を守つて少しも變せざる心なり。大丈夫この心を存せざれば、我が好惡する所に於て必ず屈し易く、義を守るところ確ならざるなり。故に剛操を以て信を立て義を堅くするを行とするなり。淸廉正直も剛操を以てせざれば立たず。いはんや士たるの道、常に剛毅を以て質とし、その守る所を變せざるを以て行とす。人皆生死利害好惡あり。剛毅節操を高く守るにあらざれば、誰かこの行をなさんや。（山鹿素行の文による）

「胸中には如何の感があつたらう」

小笠原長生 海軍中將。慶應三年生まる。海軍軍令部出仕、東宮御學問所幹事等に歷任す。

山鹿素行 兵學者。名は高祐。會津の人。聖教要錄を著す。貞享二（二三四五）年歿す。年六十四。

一八 蠶

これはある農學士から聞いた話であるが、桑の葉には殆ど蛋白質がないさうである。そしてそれを食ふ蠶自身の身體にも、亦蛋白質は極めて乏しいさうである。ところが、その蠶が桑の葉を食べて作り出すところの繭は、殆ど全部蛋白質で出來上がつてゐるものだといふことである。蛋白質の少い蠶が蛋白質の少い桑の葉を食べて、蛋白質ばかりの繭を作り出すといふことは、實に奇妙なことである。どうしてかういふことが起り得るのか、それはまだ現代の科學では說明がついてゐない。けれども、私はこの話を聞いた時、これだなと思つた。

「ある農學士から聞いた話」

蛋白質

「これだなと思つた」

專門家にすら分つてゐないことが、私のやうな蠶に手を觸れたこともないものには、勿論分らう筈がない。併し私はたゞこの事實に驚嘆した。驚嘆すると同時に、はたとあることを感得した。いふまでもなく蠶の腹の中がどうなつてゐるのか、腹の中に這入つて行つた桑の葉がどう變化するのか、そんなことは全然自分には分らないけれども、あの小さな蟲が外界から材料をとり入れて、それを全く自分自身のものにしてしまひ、そしてすつかり自分自身のものとして、あの美しい繭を新しく吐出してゐる働には、自分はひたすら驚嘆せざるを得ないのである。蠶は桑を食べて繭を生み出してゐる。桑を材料として、決してそれを生のまゝで吐出してはゐない。蛋白質のないものから蛋白質を作り出して

「たゞこの事實」

「すつかり自分自身のものとして」

ゐる。ある意味からいへば無から有を生じてゐる。

自分は今蠶の例をとつたけれども、外界のものを攝取して自分のものにしきつてゐるのは、たゞ獨り蠶だけの生活ではない。よく見ると、世の中の生きとし生けるものが皆さうでないものはない。庭前の一木一草にもそれは明かにあらはれてゐる。松の樹を見よ。松は土中から養分を吸收して、すつかり自分のものにしてゐるではないか。あの青々とした松葉はどうだ。あの逞しい幹はどうだ。然も土中のどこにああいつた材料があるのだ。松は水や空氣や土壤を材料としながら、立派な松の樹としてどん〳〵伸びて行つてゐるのである。無機物を有機物に變化させて行くといふだけでも、實に奇蹟的な大事業ではないか。併しこれは決して手品で

攝取

「生きとし生けるものが皆」

無機物 有機物

はない。材料を攝取したとき、一大轉囘を與へてゐるのである。卽ちそちらのものにしておかないで、みんなこちらのものにしてしまふのである。そしてこちらのものとして、改めて吐出してゐるのである。この働こゝに全心を擧げて見るべきものがあるのではあるまいか。

自分は思ふ、藝術の急所は確にこゝであるとさう思つて見てゐると、私は一匹の蠶、一本の松に對しても、自ら頭の下がるのを覺えるのである。（山本有三の文による）

ものがあるから見えるのではない。見えるからものがあるのである。美しいから美しく見えるのではない。ほんとうに美しいと感じたとき、そこにはじめて美が湧くのである。凡ては見る眼である。見る心である。見る人である。（山本有三）

「全心を擧げて見るべきもの」

山本有三　劇作家。名は勇造。明治二十年栃木縣に生まる。東京帝國大學獨文科の出身。現に早稻田大學講師たり。

一九　小品二題

町外れ

東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅街道となり、或は中原街道となり、或は大山街道となつて、郊外の林地、田圃に突入する處の、市街ともつかず、宿驛ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して、一種の光景を呈して居る場處を描寫することが、頗る自分の詩興を喚び起すのも妙ではないか。なぜかやうな場處が我等の心を惹くのだらうか。自分は一言にして答へることが出來る。卽ち斯樣な町外れの光景は何となく人をして社會といふものの縮圖でも見るやうな思をさせるからであらう。言葉を換へると、田

甲州街道　東京市外新宿より甲府方面に到る。

青梅街道　東京市外新宿より青梅町方面に到る。

中原街道　東京市外大崎町より神奈川縣中原町方面に到る。

大山街道　東京市外澁谷町より神奈川縣厚木町方面に到る。

「一種の生活と一種の自然」

舍の人にも、都會の人にも、感興を起させるやうな物語、小さな物語、而も哀の深い物語、或は抱腹するやうな物語が、二つ三つ其處らの軒先に隱れて居さうに思はれるからであらう。更に其の特點を言へば、大都會の生活の名殘と田舍の生活の餘波とが此處で落合つて、緩やかに渦を捲いて居るやうに思はれるからであらう。

見給へ、其處に片眼の犬が蹲つて居る。此の犬の名の通つて居る限が卽ち此の町外れの領分である。

見給へ其處に小さな藁家がある。二三の人の影法師が障子に映つてゐる。外は夕闇が罩めて、畑の臭とも、土の臭とも分ち難い臭が淀んで居る。大八車が二臺三臺と續いて通る。其の空車の轍の響が喧しく起つては絕え、絕えては起つて

「軒先に隱れて居さう」

「犬の名の通つてゐる限」

大八車

居る。

見給へ、鍛冶工の前に二頭の馱馬が立つてゐて、其の黑い影の横の方で、二三人の男が何事をかひそ〳〵と話し合つて居るのを。蹄鐵の眞赤になつたのが鐵砧の上に置かれ、火花が夕闇を破つて往來の中ほどまで飛ぶ。話して居た人々がどつと何事をか笑ふ。月が家並の後ろの高い樫の梢まで昇ると、向の片側の屋根が白んで來る。

カンテラから黑い油烟が立つて居る。其の間を村の者町の者、十數人驅廻つてわめいて居る。いろ〳〵な野菜が彼方此方に積並べてある。これが小さな野菜市、小さな競賣場である。

日が暮れると直ぐ寢てしまふ家があるかと思ふと、夜の

「火花が夕闇を破つて」

二時頃まで店の障子に火影を映して居る家がある。理髮店の裏が百姓屋で、牛の唸る聲が往來まで聞える。酒屋の隣家が納豆賣の老爺の住家で、毎朝早く納豆々々と嗄れ聲で呼んで都の方へ向かつて出掛ける。夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通り始める。ごろ〳〵、がた〳〵、絶間が無い。九時・十時となると、蟬が往來から見える高い樹で鳴出す。だん〳〵暑くなる。砂埃が蹄や轍に煽られて虚空に舞揚る。蠅の群が往來を横ぎつて、家から家、馬から馬へと飛んでゆく。

それでも十二時のドンが微かに聞えて、何處となく都の空の彼方で汽笛の響がする。（國木田獨步—「武藏野」）

漁村の秋

漁村の鄙びた垣根にも、白い木槿の花が咲盛り、まだ實の

「理髮店の裏」

「酒屋の隣家」

「何處となく都の空の彼方で」

國木田獨步 小說家。名は哲夫。千葉縣に生まる。早稻田大學に學ぶ。明治四十年歿す。年三十八。

青い無花果の廣葉や、錦木の梢に、初めて秋らしい風の音が騷ぎ立ちます。

鮑・海螺の貝の散らかつてゐる磯臭い小庭にも、赤や黃のあやしげな鷄頭も咲出しました。つや〳〵した紅い雁來紅も、破れかけた葭簀を透して、まんまるな太股をはだけて眠つてゐる子供の顏まで眞赤にしました。其處此處に鹹い水の湧く井戸の端には、鳳仙花が末方になつて、桔槹のきいきい響く度に、實がはじけ、水汲みに來る女どもの無駄話も、日增しに長くなりました。

其の頃です、城ケ島の草山や、諸磯・油壺の野山に薄紅の芒の穗が靡き出し、桔梗や、女郎花や、其の他の秋草などがちらほら咲出すのは。朝など浴衣の裾をまくつて步いてゐると、

錦木

「秋らしい風の音が」

鮑——あはび

城ケ島 神奈川縣三浦郡。三浦半島のはづれにある小島。

諸磯 同郡三崎町。城ケ島の對岸。

其處らの葛の葉や稗草にも、一杯に玉の様な涼しい白い露が亂れて、ちぎれた草の葉などが、きり〴〵すの様に素股にくつついたり、青くはねたりします。

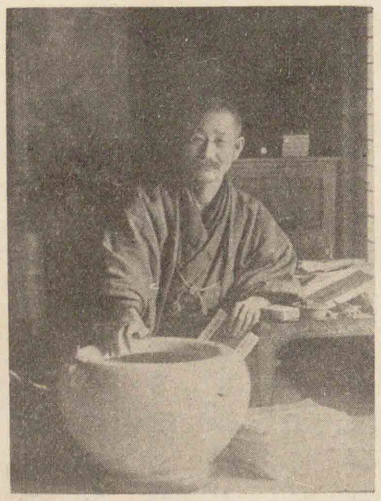
其の頃です、紅い髮の毛を亂し垂らした玉蜀黍がぽきぽきともがれ出すのは。殘暑の酷しい光線の中に、蜻蛉が出盛り、段々畠の胡麻の花も實になり、赤つちやけた枝豆の中に俯向いてゐる麥稈帽の縁の反射までが、いかにも秋らしく光つて見える頃になると、郊外の豚小屋にごろ〳〵寝てゐる豚の鼾にも、幾分の涼しさが感ぜられ、棕櫚の葉のそよいでゐる街道のだら〳〵坂をかけおりてくる田舍馬車の喇叭の音さへが、何と云ふ事なく心細く聞えて來るやうになります。

（北原白秋―「童心」）

「麥稈帽の縁の反射」

北原白秋　詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生まる。早稻田大學英文科修學。

二〇　田園雜興



大町桂月

みづから世を避けて門を鎖すとにはあらねど、片田舍に住めば來り訪ふものおのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一宇の茅屋建てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や櫻や柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、その間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然何となくわが心に適する處なり。

「門を鎖すとにはあらねど」

花園神社　今東京市四谷區三光町にあり。

環堵蕭然

われ生來病軀を抱けり。わが志を伸ばさんには、まづわが體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到りおよばず。啻にわが心に適するのみならず、またわが體に適するを以て、居をこゝに定めぬ。都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛來りてわが手の風呂敷包に取りすがる。例として土產の菓子あらんことを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥づかしけれ。

蒸しあつき夏の夕べ、涼臺を無花果樹下に移して、一家晩餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣自ら盤上に迸る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。いま一つ、一匹の犬いつも食時をたがへず來りてかしこまる。これ

「滿園の綠樹笑つて我を迎ふ」

「一鉢の飯」

近隣の家に飼へるものなり。その主人、近頃、妻子を殘して病死せり。喪家の狗の譬おもひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯などを與ふるに、たゞ鼻先にて嗅ぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、淸水涌出でて流れて田に注ぐ。もとは朽木、中に滿ちて、蛙や蠑螈の棲處となり、岸には雜草おひ茂りて見るかげもなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、蠑螈を捕へ出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙・蠑螈のみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて泳ぎめぐり、人の足音聞きては穴深く潛みゆく。大兒と中兒とこ

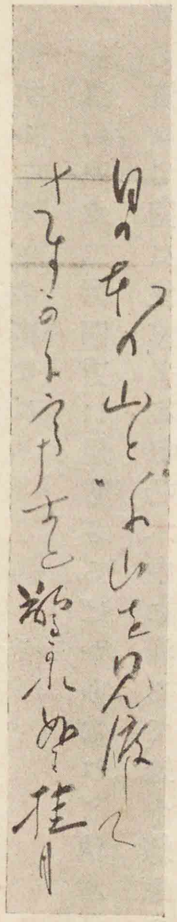
喪家の狗　新たに死人ありし家の犬。孔子家語に、「纍然トシテ若二喪家之狗一」

一泓

蠑螈——ゐもり

鑑む

れを見て興がり、今少し鯉を入れよと言ふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黑や、碧水に一種の模樣を描き、或は集り、或は散じ、時には水面に喚喝し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋の上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、兒にとりてはこの上もなき慰みなり。



大町桂月筆蹟

おぼつかなげに「とゝとゝ」と呼びて、雛に餌を與ふることも亦小兒が慰みの一つなり。家の四方に散在せる雛、この聲を聞きて喜んで來り集り、先を爭うて食ふ。雄三羽、雌七羽あ

喚喝

日の本の山といふ山を見渡してさすがに富士と驚かれぬる　桂月

り。種類も一ならず。就中鬪雞の雌一羽、最も慓悍なり。餌を食ること最も甚しく、近寄るものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎さげにて、他の雛恐れて敢へて近寄らず。されど最も大にして好き卵を産むはこの鬪雞なり。

われ平生物累ひなきことを期す。身には惜しき物を帶びず、家にも惜しき物を置かず。身邊の物品、すべて用を便ずるを以て足れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外には、又、他の物なし。雛、遠慮なくも座に上がり來り、机上に立ちて鳴くことあり。護謨靴はきて庭に遊べる小兒、いつの間にやら靴のまゝ上がり來ることもあり。されど、雛上がらば追ふべきものと心得て、おのれは靴のまゝ上がり居りながら、兩手ひろげて雛を追出すもいとあどけなし。末の兒は末だろ

慓悍

「すべて用を便ずるを以て足れりとす」

くに口もきかれぬばかりの年頃なり。母の乳に飽けば、をりをりわが机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。あまりにおとなしきに不圖心づきて見れば、折角わが書きたる原稿を塗抹せることあり。

夕闇の端居に、裏の田より竹林を越して、二つ三つの螢飛來るを見て、あれ捕へてよと兒の請ふまゝに、これを捕ふれば、蜀を望むのならはし、田に行きて多く捕へてよと請ふ。田に行けば螢多し。忽ちの間に數十匹捕へつ。俄作りの螢籠に入れて打興じたる兒等も、やがて蚊帳の中に入り、枕邊の螢光いよ〳〵涼し。

園中、兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、

蜀を望む　貪りて足ることを知らざる意。後漢書に「人苦レ無レ足、既得レ隴望レ蜀」

「園中、兒を喜ばしむるもの」

栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見ればたゞ嬉しきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初はその愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異の潜めるが如く思はる。而して、小兒は人類の中にて最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しきわが團欒にも、なほ一朶の愁雲たなびく。そはわが胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、われと相住むことも前後僅に十餘年に過ぎず。末年、われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るに、わが病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の

子を持つて云々　俚諺に「子を持つて知る親の恩」

古稀

苦楚

空に變ぜしめんとす。母は常にわが病身なるを氣づかひ、わが食少きを心配す。さればこそ「親を思ふ心にまさる親心。」と詠じけめ。世に、子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。罪深きかな。抑〻不幸の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名ゆゑ、われは親ゆゑに強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものするに到りぬ。食進むやうになりて嬉しとて、母の喜ぶさまを見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。

（大町桂月―「桂月全集」）

いで湯わく蔦のやまみち小夜ふけて月のみわたる猿の空橋（からはし）

（大町桂月）

親を思ふ云々　吉田松陰の歌に、「親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ。」

廉頗　レンパ。趙の名將。史記に「一飯斗米、肉十斤、被甲上馬、以示尚可用。」

健啖

大町桂月　文學者。名は芳衞。高知縣に生まる。東京帝國大學國文科の出身。大正十四年歿。年五十七。

二一　小園の記

正岡子規

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空庭の外に擴りて、雲行き、鳥翔る樣もいとゆたかに眺めらる。初めてこゝに移りし頃は、僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて、稍〻物めかしたるに、隣の老嫗の與へたる薔薇の苗さへ植添へて、四五輪の花に吟興を皷せらるゝことも多かりき。

一年軍に從ひて金州に渡りしが、其の歸途病を得て、須磨

小園　東京市下谷區上根岸町。

「僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく」

物めかす

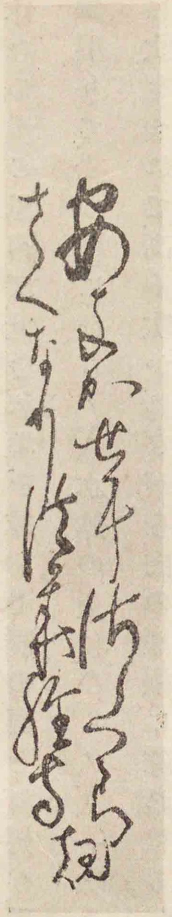
吟興

一年

に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を經て家に歸り着きし時は、秋將に暮れんとする頃なり。庭の面去年よりは遙かにさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲亂れたる、此の景に對して靜かに昨日を思へば、萬感そゞろに胸に塞り、辛き命を助りて歸りし身の衰は、たゞ此の嬉しさに勝たれて、思はず「三逕就荒。」と口ずさむも涙がちなり。ありふれたる此の花狹くるしき此の庭が、斯くまで人を感ぜしめんとは、曾て思ひよらざりき。まして此より後、病いよ〱募りて足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は余が天地にして、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、此の十歩の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。

金州　關東州の都邑。金州灣に臨む。
故郷　松山市なり。
さびまさる
三逕就荒　逕は小徑なり。陶淵明の歸去來辭に「三徑就荒、松菊猶存。」
「草花は余が唯一の詩料となりぬ」
芳葩

次の年、春暖漸く催して、鳥の聲いとうらゝかに聞えしある日、病の窓を開きて、端近くにじり出で、讀書に勞れたる目を遊ばすに、いき〱としたる草木の生氣は、手のひらほどの中にも動きて、まだ薄寒き風のひや〱と病衣の隙を侵


正岡子規筆蹟

すも、いと心地よく覺ゆ。これも隣の嫗より貰ひしといふ萩の刈株、寸ばかりの綠をふいて、遲しき勢は秋の色も思はる。眞晝過より、夕陽椎の樹に落つるまで何を見ることなく、醉うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮すことさへ多かり。

あきかぜにさくらさくなり法華經寺　子規
「醉うたるが如く、勞れたるが如く」

今まで病と寒氣とに惱まされて、弱り盡くしたる余は、此の時新に生命を與へられたる小兒の如く、此より萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛來りて、垣根に花をあさるを見ては、そゞろに我が魂の自ら動き出でて、共に花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて隣の庭を打廻り、再び舞戻りて、松の梢にひら／＼、水鉢の上にひら／＼、一吹き風に吹きつれて、高く吹かれながら、向の屋根に隱れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて、心地なやましく、内に入り、障子たつると共に、蒲團引被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限無き原野の中にありて、今飛去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何

惘然

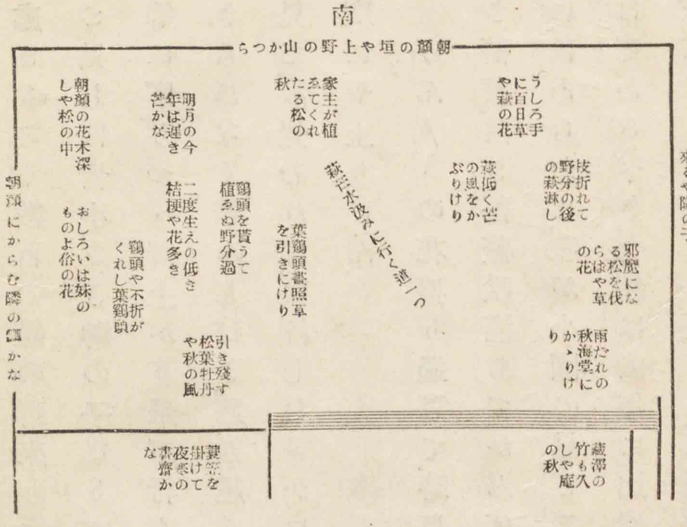
處ともなく、數百の蝶の群來りて遊ぶを、つら／＼見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞上がり飛び行くに、我もおくれじと茨葎のきらひなく踏みしだき躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢汗したゝかに襦袢を濕して、熱は三十九度にや上りけん。

げん／＼の花盛り過ぎて、時鳥の空におとづるゝ頃は、赤き薔薇、白き薔薇咲滿ちて、かんばしき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見どころはまことに萩・芒のさかりにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに萩の勢強く、夏の初の枝ぶりさへいたく蔓りて、末頼もしく見えぬ葉の色も去年の梢、黄ばみたるには似ず、綠いと濃し。空晴れたる日は椅子

茨葎

げん／＼　れんげ草のこと。紫雲英。

を其のほこりに据ゑさせ、人に扶けられ、やうやく其の椅子にたどりつき、氣晴しがてら萩の芽につきたる小さき蟲を取りしことも、一度二度にはあらず。



桔梗・撫子は實となり、朝顔は花の稍〻少くなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり。飛立つばかりの嬉しさに、指を折りて、あすは四つ、あさつては八つ、十日目には千にやなるらんと思ひ設けしほどこそあれ、ある夜野分の風烈しく吹出でぬ。安からぬ夢を結びて、あくる朝日たけて眠より覺むれば、庭に何やらのゝしる聲す。心もとなく這出でて、何ぞと問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折れしをれたるなりけり。ひたと胸つぶれて、いかにせばやと思へど、せんなし。斯くと知りせば、枝に杖立てて置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹飛ばしたる去年の野分にだに、かうはならざりしを、今年の風は萩のために方角や惡しかりけん。此の日は晴れわたり、稍〻秋氣を覺え初めしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥とに水を湛へて、折れ殘りたる萩の泥を洗ひたりしかど、空しく足の痛みを増したるばかりにて、泥つきし枝のさきは、蕾腐りて、終に花咲

「待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり」

「萩のために方角や惡しかりけん」

くことなかりき。園中何事もなきは、只松と芒とのみ。

去年の春、彼岸やゝ過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、直ぐに播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鷄頭を欲しかりしを、いと口をしく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはししものあり。去年葉鷄頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくて四邊の晝照草など引きのけ、やうやう尺餘になりし頃、野分荒れしかば、こればかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉鷄頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば、恙なくて今は二尺ばかりになりぬ。痩せてよろ／＼としながら、なほ燃ゆるが如き紅しだれて、いとうつくし。二三日ありて、向の家より貰ひ來れりとて、肥太りたる鷄頭四本ばかり植添へたり。其の次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きなる葉鷄頭一本引提げて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ手づから植ゑて去りぬ。鷄頭・葉鷄頭かゞやくばかり華やかなる秋に壓されて、萩ははや散りがちなるもあはれ深し。薔薇・萩・芒・桔梗などを惠まれて、余が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、其の後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりしとぞ聞えし。

ごて／＼と草花植ゑし小庭かな　（正岡子規—「子規全集」）

鷗外漁史　森林太郎の號。

「嬉しくて四邊の晝照草など引きのけ」

恙なし

不折子　中村不折。洋畫家。名は鈼太郎。慶應二(二五二六)年信州に生まる。洋畫研究のため歐洲に留學し、現に帝國美術院會員たり。

「ごて／＼と草花植ゑし小庭かな」

正岡子規　俳人・歌人。名は常規。松山市に生まる。東京帝國大學國文科に學ぶ。明治三十五年歿す。年三十六。

釋語

一　自學自習の精神に基き本文中の語句の解釋を列擧したものである。一語意の轉用に就いては、更に辭書を調べる習慣を養ひたい。

一　辭書使用訓練の目的を以て、常に次の要件を見落さぬやうに注意せよ。

イ　訓方。

ロ　文法上の品詞の性質。

ハ　同意語・同音語・對照語・熟語。

一　學者の苦心

【心祝】　コヽロイハヒ。別におもてだつてせぬ祝。心ばかりの祝。

【典籍】　テンセキ。よりどころとせる書物。

【歯痒い】　ハガユい。もどかし。じれつたし。

【砂子】　イサゴ。極めて細かき石。

【緒に就く】　チョにツく。仕事のいとぐちにつくこと。緒　音ショ。いとぐち。慣用にてはチョと發音す。

【拮据】　キッキョ。忙しく働くこと。

【文物】　ブンブツ。すべて一國の文化に關するもの。制度・法律・藝術・科學等。

【紛糾】　フンキウ。ごた〳〵とこみいりたること。

【大白】　タイハク。大いなるさかづき。

二　花影の中に

【遊絲】　イトユフ。陽炎(カゲロフ)のこと。

【本丸】　ホンマル。城の中央、主將のゐる處。本城。

【奇兵】　キヘイ。敵の不意に乗じて攻寄せる兵。

【大義】　タイギ。君國に對する正しく大なる道。

【潺湲】　センクヮン。水の流るゝ樣。またその音にもいふ。

【歴落】　レキラク。いりまじりて並ぶさま。

【丁々】　タウ〳〵。木を伐る音。

【風情】　フゼイ。おもむき。あぢはひ。

【榛莽】　シンバウ。シンマウ。草木の亂れ茂りたる藪。

【おとしめ】　みさげる。さげすむ。

【方便】　ハウベン。てだて。一時利用する手段。

【苦肉の計】　クニクのケイ。敵を計らんとする時などに、己の身に苦痛を與へてまでする計。

【鼎立】　テイリツ。鼎の足の如くに三つのものの並びたつこと。

【つたない】　拙劣なること。運の悪きこと。

【蹌々踉々】　サウ〳〵ラウ〳〵。歩みのよろ〳〵と亂るゝさま。蹌踉。

【草莽の孤臣】　サウマウのコシン。官に仕へずして民間にある一人の臣。在野の臣。

三　山路の茶屋

【屈託氣】　クッタクゲ。退屈さうに。

【とぐろを捲く】　蛇が其の體を捲きたる如くうづ巻きてあること。

【非人情】　ヒニンジャウ。人間ばなれのしてゐること。

【活人畫】　クヮツジングヮ。或る事柄を繪畫的に現さんために、相當の裝置を設けて場所の光景を示し、各人

切取線

所要の服裝をなして、その中に現れ、一定時間、動くことなく、恰も畫中の人物の如くに靜止して在るもの。
【刳拔盆】 クリヌキボン。一枚の板をくりぬきて作りし盆。
【袖無し】 ソデナし。兩袖のなき綿入羽織やうのもの。ちやん〳〵こ。
【逡巡】 シュンジュン。ためらふこと。ぐず〳〵とすること。はつきりせぬこと。
【巑岏】 サングヮン。鋭く尖りたる山。また、山の鋭くとがりたる貌。

四　詩二篇

【伸張】 シンチャウ。のばしはる。おしひろめる。
【擴充】 クヮクジュウ。おしひろげて十分に充たす。

五　蓮

【素純】 ソジュン。清くしてまじりけなきこと。
【幽玄】 イウゲン。趣味深くして味ひの盡きざること。
【周知】 シウチ。あまねく知れてゐること。
【窒息】 チッソク。息のふさがりとまること。
【花卉】 クヮキ。花の咲く草木。
【腐爛】 フラン。くさりきつてしまふこと。
【鏖殺】 アウサツ。みなごろしにすること。
【蓮の臺】 ハスのウテナ。佛の坐したる蓮華の臺座。死後、極樂に入れば、皆佛となりて、この座に坐る。

六　灯を消して

【躊躇】 チウチョ。ためらふこと。猶豫。
【遺憾】 ヰカン。のこりをし。殘念。

七　銃

【小哨】 セウセウ。休止の軍隊に於て、緊要なる道路、主要の地點等の警戒に任ずる部隊。前方に步哨を出す。
【斥候】 セキコウ。敵の狀態を知るために派す兵。斥候長以下少くも二名の兵をつく。
【偵察】 テイサツ。居處の已に知れたる敵の情勢と、地形とを、更に探りしらぶること。
【叉銃】 サジュウ。執銃部隊が室外に休憩する時、各自の銃を交叉して立ておくこと。普通四人の銃を以て叉銃を組む。
【彈藥盒】 ダンヤクガフ。兵卒の腰の周圍に帶革でつけたる革箱。彈藥を納む。
【衞戍病院】 ヱイジュビャウヰン。その地の軍隊内の患者を收容治療する病院。
【班長】 ハンチャウ。中隊を幾つかに分ちたるものを班といふ。その長。
【看護卒】 カンゴソツ。軍隊に於て、傷病兵の介抱に從ふ兵卒。
【副官】 フククヮン。軍部に於て、各團隊長に屬し、その命を受けて、その團隊に關する色々の事務を處理する職。こゝにては聯隊副官。

八　孤島より

【測量】 ソクリャウ。地面の位置・廣狹・高低等をはかること。
【極地】 キョクチ。地球の南北端及びその附近をいふ。

【鴉】 カラス。音ア。鳥の一種。形小さく、嘴太しといふ。
【卯木】 ウツギ。虎耳科。落葉灌木にして高さ七八尺に達す。
【簇生】 ソウセイ。又ゾクセイ。むらがりはえてあること。
【他界】 タカイ。あのよ。人間の世界でなき世界。

九　長江溯江記

【旋律】 センリツ。音樂の調子。
【一籌】 イッチウ。籌は數を數ふるに用ふるかずとり。「一籌を輸す。」とは、人に一籌だけ負くる義。
【髣髴】 ハウフツ。さも似たりぼんやりと想見する意。彷彿。
【袜帽】 バツバウ。袜は長き布を以て頭をつゝみたること。ターバン。
【淹留】 エンリウ。久しくとゞまる。こゝは滯在の意。
【僑居】 ケウキョ。かりずまひ。假寓。
【柳暗く云々】 柳がくらく茂り、花の色あきらかなるの意。田舍の春景色をいふ。柳暗花明。
【房艙】 バウサウ。船中の室。
【胡弓】 コキュウ。樂器。三味線に似て小さく、弓にて擦りて鳴らす。
【複樓】 重層のたかどの。
【矚望】 テイバウ。ほしいまゝに眺むること。
【洸洋】 クヮウヤウ。水の深く廣き貌。
【眷族】 ケンゾク。家族に同じ。眷屬。
【膠坐】 カウザ。膠もてつけたる如く、離れずに留まること。
【參差】 シンサ。等しからざる貌。
【匹儔】 ヒッチウ。比較すべきもの。たぐひ。
【盤渦】 バンクヮ。水のうづまけるもの。
【阿修羅】 アシュラ。形恐ろしき印度の鬼神。
【河伯】 カハク。河神。
【具象】 グシャウ。かたちに現れたるもの。あらはれ。

一〇　海の旅

【消息】 セウソク。おとづれ。たより。音信。
【あからさま】 あらはなること。遠慮なく。
【條理】 デウリ。すぢみち。
【先蹤】 センショウ。先人のなしたるあと。しきたり。
【荒寥】 クヮウレウ。あれてさびしきこと。荒涼(クヮウリャウ)に同じ。

一一　木精

【深山薄雪草】 菊科。山地に生ず。高さ一尺ほど。
【高音】 聲樂の方でいふ語。高き聲。ソプラノ。
【最低音】 聲樂の方でいふ語。最も低き聲。バス。
【次高音】 聲樂の方で高音の次に位する高き聲。アルト。
【痲痺】 マヒ。しびれること。感覺を失ふこと。

一二　廢れたる園 (歌評)

【暮春】 ボシュン。春の終。晩春。
【愛誦】 アイショウ。氣に入りて讀むこと。誦は聲に出してよむ。
【敍景】 ジョケイ。景色を筆にのぼせてそのまゝうつすこと。
【瞞着】 マンチャク。目をくらますこと。

一三　轡十文字

【手醫師】テイシ。江戸時代の町奉行常雇の醫師。奉行手の醫師。
【老層】ラウト。年老いたる下人。
【茫洋】バウヤウ。ひろくして何もなきこと。芒洋。
【あきらむ】あきらかにすること。

一四　近江聖人

【化育】クヮイク。德を以てよく人を感化し教育すること。
【儒】ジュ。學者。孔子を祖とする教の道にたづさはる學者。

一五　野火止の用水

【野趣】ヤシュ。田野の趣。素朴なる趣。
【代官】ダイクヮン。江戸時代に或一地方を支配するため任命せられて、その地方の一切の政治を掌りし役。

一六　草の句

【菜食主義者】サイショクシュギシャ。植物質の食物は頭腦をよくし、心を平和にし、長命を得とて、專らこれを食するを自己の主張とする人々。
【表現】ヘウゲン。表面に現るゝこと。あらはれ。
【はぜる】爆る。開きて裂く。ふくれてそりかへる。はじく。
【小姓】コシャウ。貴人の側近く召仕はれて、雜用を足す少年。
【白い齒を見せる】敵意をもつて對すること。反抗心を持つこと。

一七　撃滅

【宸襟】シンキン。天皇陛下の大御心を申す。おほみこゝろ。
【叡慮】エイリョ。天皇陛下の大御心を申す。宸襟。
【聖顏】セイガン。天皇陛下の御顏を申す。玉顏。龍顏。
【やはか】よもや。
【信念】シンネン。自信の心。
【神機】シンキ。靈妙なる神のはたらき。測り知るべからざる神の機略。
【冥々の裏】メイ〳〵のウチ。冥々はくらき貌。又幽かにして認め難きこと。意は眼に見えざる處に於てといふほどのことなり。
【かりそめにも】かりにも。ついちよつとしたることにも。
【脅威】ケウヰ。おびやかしおどすこと。
【端的】タンテキ。事の明白なるさま。こゝにては明瞭にといふほどの意。
【明々白々】メイ〳〵ハク〳〵。明白と同じ。あきらかにしてはつきりしたること。
【敬恭莊重】つゝしみぶかくして、且おも〳〵しきこと。
【忖度】ソンタク。他人の心をおしはかること。

一八　蠶

【蛋白質】タンパクシツ。炭素・酸素・水素・窒素等よりなる複雜なる化合物。卵の白味はその最も純粹なるものなり。
【攝取】セッシュ。とりいる。
【無機物】ムキブツ。生活するもの（動物・植物等一切生命あるもの）の中にて作られたるものにてはあらざるもの。例へば水、空氣など。
【有機物】イウキブツ。生活するものの內にて作られたる物。

一九　小品二題

【大八車】ダイハチグルマ。大なる荷車の一種。
【錦木】ニシキギ。衞矛科。各地の山野に自生する落葉灌木。高さ一丈に達し、初夏黃綠色の小花を開き、秋に到りて、赤色の實をつく。

二〇　田園雜興

【環堵蕭然】クヮントセウゼン。狹き家の貧しくさびしき貌。
【一泓】イチワウ。ひとたまり。泓は水のひくゝ深きこと。
【鑑む】カンガム。うつして觀る。
【噞喁】ゲンギョウ。魚の口の水上にあらはるゝ貌。
【慓悍】ヘウカン。すばやくあらし。剽悍。
【古稀】コキ。人の七十歲に達せるをいふ。
【苦楚】クソ。くるしみ。楚は恐れて安んぜざる貌。
【健啖】ケンタン。多くくらふこと。大食。健飯。

二一　小園の記

【物めかす】物體らしくす。こゝには庭らしくすること。
【吟興】ギンキョウ。詩歌を吟詠せんとする興味。
【一年】ヒト、セ。或年。作者は明治二十八年從軍記者として戰地に赴きたり。
【さびまさる】「さぶ」は時代がつくこと。澁味の加はること。「まさる」は增す。澁味が加はりて。
【芳葩】ハウハ。芳しき花。葩は花なり。
【惘然】バウゼン。ぼんやりとするさま。
【茨】イバラ。刺のある小さき木の總稱。
【葎】ムグラ。やへむぐら・かなむぐらの二種あり。雜草なり。
【恙なし】ツ、ガなし。恙は憂なり。さはりなし。すこやかなり。

昭和五年六月二十三日印刷
昭和五年六月二十六日發行
昭和五年十一月二十二日訂正印刷
昭和五年十一月二十五日訂正發行

國文選（全十册）

定價	
自卷一至卷四	各金四拾三錢
自卷五至卷十	各金三拾九錢

昭和六年度臨時定價	
自卷一至卷四	各金六拾八錢
自卷五至卷十	各金六拾貳錢

不許複製
垣内

編者　垣内松三

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地
株式會社　明治書院
取締役社長　鈴木友三郎

印刷者　東京市神田區雉子町三十四番地
綾部喜久二

發行所　東京市神田錦町一丁目
（振替東京四九九一番）
株式會社　明治書院
電話神田一四一四番